

中小規模河川赤山川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

## 飯野・東二瓦礫遺跡

2018.3

香川県教育委員会

## 序 文

本書には、中小規模河川赤山川改修事業に伴い発掘調査を実施した、香川県丸亀市飯野町東二に所在する飯野・東二瓦礫遺跡（いいの・ひがしふたがらくいせき）の報告を収録しています。

飯野・東二瓦礫遺跡では、弥生時代後期から近世に至る遺構・遺物が出土し、遺跡周辺における土地利用の変遷について、貴重な資料を得ることができます。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、香川県中讃土木事務所及び関係諸機関、地元関係者各位には、多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成30年3月

香川県埋蔵文化財センター

所長 増田 宏

## 例　　言

1 本報告書は、中小規模河川赤山川改修事業に伴い発掘調査を実施した、香川県丸亀市飯野町東二に所在する飯野・東二瓦礫遺跡（いいの・ひがしふたがらくいせき）の報告を収録している。

2 発掘調査は香川県教育委員会が調査主体、香川県埋蔵文化財センターが調査担当者として実施した。

3 発掘調査期間と担当者は次のとおりである。

期間 平成21年4月1日～平成21年9月30日

担当 文化財専門員 森下友子 文化財専門員 木下晴一

4 調査及び整理作業において次の方々、関係機関の協力を得た。

安部百合子、池澤俊幸、池淵俊一、磯久容子、大栗美菜、大野哲二、大室謙二、岡本桂典、尾川伸弘、小田芳弘、加納裕之、亀井英希、河合章行、川上昭一、木村哲也、兒玉洋志、近藤大器、佐々木達也、柴田圭子、島田豊彰、白石聰、曾我満子、高橋浩樹、高屋茂男、中村文枝、端野晋平、林健亮、福代宏、松村信博、三阪一徳、向井公紀、吉岡和哉

香川県立讃土木事務所、丸亀市教育委員会、まんのう町教育委員会、徳島大学埋蔵文化財調査室、愛媛県教育委員会、高知県立埋蔵文化財調査センター、高知県立歴史民俗資料館、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター、島根県立古代出雲歴史博物館、島根県立八雲立つ風土記の丘、徳島県立埋蔵文化財総合センター、鳥取県立博物館、公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室、阿南市教育委員会、出雲弥生の森博物館、今治市教育委員会、京都市考古資料館、倉吉市教育委員会、香南市文化財センター、西予市教育委員会、津和野町教育委員会、徳島市教育委員会、公益財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課、府中市教育委員会、防府市教育委員会、松江市埋蔵文化財調査室、松山市立考古館、湯梨浜町教育委員会、一般財団法人米子市文化財団調査室、地元自治会、地元水利組合

（順不同、敬称略）

5 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は藏本晋司が担当した。

6 本報告書で用いる座標系は世界測地系（国土地図第IV系）で、標高は東京湾平均海面を基準とした。

7 遺構は次の略号により表示した。

SB 掘立柱建物 SP 柱穴・小穴 SK 土坑 SD 溝 SR 自然河川

SX 性格不明遺構 SZ 水田遺構

8 遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線（単位m）である。

9 遺構断面図中の注記の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。

- 10 土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 32 版』及び長崎盛輝『新版 日本の伝統色 その色名と色調』、青幻舎を参照した。また、残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。
- 11 石器実測図中の外郭線周囲の線は潰れの範囲を示している。図の左側に展開した面を A 面、右側の面を B 面として記述する。剥片石器の場合は A 面が背面、B 面が腹面となる。石材は表記がない限りサヌカイトである。
- 12 遺物の時期や分類は次の文献を参照した。
- 弥生土器：信里芳紀 2002 「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相－集落の検討を中心にして－」  
『第 16 回古代学協会四国支部研究大会発表要旨集：弥生時代前期末～中期初頭の動態』、古代学協会四国支部
- 信里芳紀 2005 「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年－四線文期を中心にして－」  
『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅰ』、香川県埋蔵文化財センター
- 信里芳紀 2011 「弥生中期後半から古墳初頭の土器編年」『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 2 冊 旧練兵場遺跡Ⅱ』、香川県教育委員会・独立行政法人国立病院機構善通寺病院
- 須恵器：田辯昭三 1981 「須恵器大成」、角川書店  
大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006 「年代のものさし－大阪府立近づ飛鳥博物館図録 40 －」  
佐藤竜馬 1993 「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設 40 周年記念 考古学論叢』、関西大学文学部考古学研究室
- 中・近世：尾上実 1983 「南河内の瓦器碗」『藤澤一夫先生古稀記念 古文化論叢』、藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会  
佐藤竜馬 1995 「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 18 冊 国分寺楠井遺跡』、香川県教育委員会・<sup>⑩</sup>香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公团  
佐藤竜馬 2000 「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 4 冊 空港跡地遺跡Ⅳ』、香川県教育委員会・<sup>⑪</sup>香川県埋蔵文化財調査センター  
太宰府市教育委员会編 2000 「太宰府条坊跡 X V - 陶磁器分類編 -」  
森田稔 1986 「東播系中世須恵器の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』第 3 号、神戸市立博物館  
山本悦世 2007 「鹿田遺跡における土師質土器焼の編年について」『鹿田遺跡 5』、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

# 本文目次

## 第1章 調査にいたる経緯と経過

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査と整理作業の経過	2

## 第2章 立地と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4

## 第3章 調査の成果

第1節 調査の方法	11
第2節 基本層序	12
第3節 遺構・遺物	23

## 第4章 自然科学的分析の成果

第1節 プラント・オパール分析	64
第2節 出土木製品の樹種同定	67
第3節 土器付着赤色顔料の蛍光X線分析	69
第4節 腰帶具の蛍光X線分析	71
第5節 放射性炭素年代測定	76
第6節 青銅製丸柄の科学的調査	79

## 第5章 まとめ

第1節 遺構の変遷	84
第2節 飯野・東二瓦礫遺跡出土律令期腰帶具をめぐる諸問題	88
第3節 飯野・東二瓦礫遺跡の中世建物群について	107

## 挿図目次

第1図 道跡位置図	1
第2図 道跡周辺の10cm等高線図	5
第3図 周辺地形分類図	7
第4図 周辺道路分布図	9
第5図 調査区割図	11
第6図 I区西・北壁土層断面図	13
第7図 II区西・北壁土層断面図	14
第8図 II区東・南壁土層断面図	15
第9図 III区西・北壁土層断面図	17
第10図 調査時記録（左）とSR2001平面配置（右）	18
第11図 IV区南・西壁土層断面図	19
第12図 IV区北・東壁土層断面図	21
第13図 V区南・西壁土層断面図	22
第14図 SR2001平・断面図	24
第15図 SR2001出土遺物実測図1	25
第16図 SR2001出土遺物実測図2	26
第17図 SR2001出土遺物実測図3	27
第18図 古墳時代後期～古代の遣構配置	28
第19図 SK2013平・断面図	29
第20図 SD2018・2019・2020・2021平・断面・ 出土遺物実測図	31
第21図 SD2031平・断面・出土遺物実測図	32
第22図 SZ2001平面・出土遺物実測図	34
第23図 SZ2001断面図	35
第24図 中世遣構配置	36
第25図 SB2001平・断面図	37
第26図 SZ2001出土遺物実測図	38
第27図 SB2002平・断面・出土遺物実測図1	39
第28図 SB2002出土遺物実測図2	40
第29図 SB2003平・断面・出土遺物実測図	41
第30図 SH2004平・断面図	41
第31図 SE2005平・断面図	42
第32図 柱穴出土遺物実測図	43
第33図 SK2003平・断面・出土遺物実測図	43
第34図 SD2003～2005平・断面・出土遺物実測図	45
第35図 SD2015平・断面図	46
第36図 SD2015出土遺物実測図1	47
第37図 SD2015出土遺物実測図2	48
第38図 SD2015出土遺物実測図3	49
第39図 SX2002平・断面図	50
第40図 SD2009～2012・SX2003平・断面、 SD2009出土遺物実測図	51
第41図 SX2003出土遺物実測図1	52
第42図 SX2003出土遺物実測図2	53
第43図 SX2003出土遺物実測図3	54
第44図 SX2003出土遺物実測図4	55
第45図 近世遣構配置	56
第46図 SK2001・2002・2004～2006平・断面、 出土遺物実測図	57
第47図 SK2007～2009・2010平・断面、 出土遺物実測図	58
第48図 SK2012平・断面・出土遺物実測図	59
第49図 SD2008平・断面出土遺物実測図	60
第50図 SX2001平・断面図	61
第51図 包含層等出土遺物実測図	62
第52図 プラント・オバール分布図	65
第53図 赤色顎料のX線分析結果	70
第54図 番号正結果	77
第55図 鉛同位体比を用いた产地推定の概念図（A式図）	80
第56図 鉛同位体比を用いた产地推定の概念図（B式図）	80
第57図 出土青銅製品の鉛同位体比分布（A式図）	81
第58図 出土青銅製品の鉛同位体比分布（B式図）	81
第59図 平安時代資料の鉛同位体比分布（A式図）	82
第60図 平安時代資料の鉛同位体比分布（B式図）	82
第61図 錦倉時代資料の鉛同位体比分布（A式図）	82
第62図 錦倉時代資料の鉛同位体比分布（B式図）	82
第63図 遣構変遷図1	85
第64図 遣構変遷図2	87
第65図 香川県下伊予郡腰帯具出土遺跡分布	89
第66図 金属製腰帯具実測図	91
第67図 石製腰帯具実測図	92
第68図 道路周辺の柔柔型地割	109
第69図 区画型建物群の詳例	113

## 表目次

第1表 試料1g当たりのプラント・オバール個数	64
第2表 出土木製品の樹種同定結果	67
第3表 分析結果	70
第4表 分析対象一覧	71
第5表 石製品の半定量分析結果 (mass%)	72
第6表 銅合金製品の半定量分析結果 (mass%)	72
第7表 測定試料および処理	76
第8表 放射性炭素年代測定および番号正の結果	77
第9表 分析試料	79
第10表 分析試料の鉛同位体比値	81
第11表 金属製腰帯具一覧	90
第12表 石製腰帯具一覧	90
第13表 土器觀察表(1)	120
第14表 土器觀察表(2)	121
第15表 土器觀察表(3)	122
第16表 土器觀察表(4)	123
第17表 土器觀察表(5)	124
第18表 土器觀察表(6)	125
第19表 瓦觀察表	125
第20表 土製品觀察表	125
第21表 石器觀察表	126
第22表 木製品觀察表	126
第23表 金属器觀察表	126

# 写真目次

写真1 試料採取位置および赤色顔料の生物顕微鏡写真	..70	図版14 道構写真10	..137
写真2 分析試料	..79	IV区SK2013全景(北東より)	
図版1 船野・東二ノ森遺跡のブラント・オーバル	..66	IV区SD2015土層断面(東より)	
図版2 出土木製品の光学顕微鏡写真	..68	IV区SD2015腰帶片出土状況(西より)	
図版3 蛍光X線分析測定位置(a)と 実体顕微鏡写真(b)(1)	..74	IV区SD2015銅鏡出土状況(東より)	
図版4 蛍光X線分析測定位置(a)と 実体顕微鏡写真(b)(2)	..75	IV区SD2015動物遺存体出土状況(南より)	
図版5 道構写真1	..128	IV区SD2015遺物出土状況(西より)	
I区1面全景(南より)		図版15 道構写真11	..138
I区1面全景(北より)		IV区SR2001(SD4003)土層断面(西より)	
I区SP2015遺物出土状況(南より)		IV区SR2001(SD4003)土層断面(南より)	
I区SD2018遺物出土状況(南より)		IV区2面全景(南より)	
図版6 道構写真2	..129	IV区2面全景(北より)	
I区SD2018全景(南より)		図版16 道構写真12	..139
I区SD2018土層断面(南より)		IV区SR2001(SD4003)遺物出土状況	
I区SD2003全景(北より)		IV区SX2003全景(北より)	
I区SD2003土層断面(南より)		図版17 道構写真13	..140
I区SK2001土層断面(東より)		V区全景(南より)	
図版7 道構写真3	..130	V区SR2001(SR5001)全景(南より)	
I区SR2001全景(南より)		V区SR2001(SR5001)土層断面(北東より)	
I区SR2001全景(北より)		V区SR2001(SR5001)遺物出土状況(西より)	
I区調査区北壁土層断面(南東より)		V区SR2001(SR5001)本製品出土状況(東より)	
図版8 道構写真4	..131	V区SR2001(SR5001)遺物出土状況(東より)	
II区1面全景(北より)		図版18 遺物写真1(土器)	..141
II区SP2010遺物出土状況(北より)		4・8・17・23・29・31・33・35・37・39	
II区SP2055遺物出土状況(南より)		図版19 遺物写真2(土器)	..142
II区SK2002土層断面(南より)		63・85・92・109・119・154・165・215・226・ 227・252・286・303・304	
II区SK2004土層断面(西より)		図版20 遺物写真3(土器)	..143
II区SD2008西部遺物出土状況(南より)		167・168・171・176・177・178・185・186・ 188・189・190・261・287・292・306	
図版9 道構写真5	..132	図版21 遺物写真4(土器)	..144
II区SD2003全景(南より)		77・78・98・156・157・159・160・161・ 162・163・164・278・279・280・281・282・ 283・284・285・332	
II区SD2003遺物出土状況(南西より)		図版22 遺物写真5(石器)	..145
II区SD2003土層断面(南より)		40・41・42・43・44・45・46・47・48・50・ 51・111・191・192・193・194・195・196・ 197・198・308・309・310・339・340・341・ 342・343・344・345・346・348・349	
II区SD2018全景(北より)		図版23 遺物写真6(石器)	..146
図版10 道構写真6	..133	49・52・53・199・311・312・313・331	
II区SR2001全景(南より)		図版24 遺物写真7(石器・金属器・木製品・ 貝類・動物遺存体)	..147
II区SR2001土層断面(北より)		82・89・200・201・202・203・320・321・ 322・323・324・325・347	
III区1面全景(北より)		二枚目・卷具・動物遺存体	
図版11 道構写真7	..134	図版25 遺物写真8(金属器・金属器X線写真)	..148
III区2面全景(北より)		314・315・316・317・318・319	
III区SK2007全景(南より)			
III区SK2010全景(南より)			
III区SK2009全景(南より)			
III区SX2003土層断面(南東より)			
図版12 道構写真8	..135		
III区SX2003銅鏡出土状況(北より)			
III区SR2001全景(北より)			
III区桂穴群全景(南東より)			
図版13 道構写真9	..136		
IV区1面全景(北より)			
IV区1面全景(南より)			
IV区桂穴群全景(南東より)			

## 付図目次

付図　飯野・東二瓦礫遺跡　平面図

## 第1章 調査にいたる経緯と経過

### 第1節 調査の経緯

赤山川は、一級河川土器川の支流で、丸亀市飯野町東二付近を北～北西に流下して土器川に合流する。本河川の改修事業については、香川県土木部河川砂防課が主体となり、下流域より随時工事が実施されてきた。本書掲載の工事区間については、現河川の拡幅工事ではあったが、四国横断自動車道建設に伴い昭和63年度に発掘調査を実施した飯野・東二瓦礫遺跡に隣接し、工事区域に遺跡が広がる可能性が考えられたことから、香川県教育委員会ではその取り扱いについて河川砂防課と協議を重ねてきた。

協議の結果、事業実施前に試掘調査を実施し、埋蔵文化財が確認された場合の保存協議に必要な資料を得ることで合意に達し、準備が整った平成19年度に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、事業予



第1図 遺跡位置図

定地の北半部において、条里型地割の坪界溝や掘立柱建物等の遺構を確認し、弥生土器や須恵器等の遺物が出土したことから、試掘調査を実施した範囲のうち 2,981m<sup>2</sup>について、「飯野・東二瓦礫遺跡」として文化財保護法に基づく事前の保護処置が必要と判断した。これをうけて県教育委員会は、河川砂防課と協議を行い、平成 21 年度に香川県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することで合意した。試掘調査の詳細については、報告書（香川県教育委員会 2008『埋蔵文化財試掘調査報告 X XI 香川県内遺跡発掘調査』）を参照されたい。

## 第 2 節 調査と整理作業の経過

飯野・東二瓦礫遺跡の発掘調査は、平成 21 年 4 月～同年 9 月の 6 ヶ月間で実施した。調査面積は 2,981 m<sup>2</sup>で、調査は直當方式で実施した。

8 月 22 日には県民一般を対象とした現地説明会を実施し、約 90 名の参加者があった。

整理作業は、平成 29 年 7 月 1 日より同年 9 月 30 日に香川県埋蔵文化財センターにおいて実施した。遺物の接合・図化・写真撮影と、遺構図の作成、遺構写真の整理等を行ない、本書にまとめた。出土遺物は、287 件入りコンテナ 45 箱である。遺構については、本遺跡を評価する上で必要と認めるすべての遺構について報告した。また、遺物については、遺構出土遺物のなかでも遺構の時期を直接反映するものを最優先とし、混入遺物や遺構外出土遺物についてはとくに必要と認めるもののみ掲載した。

発掘調査及び整理作業の体制は、以下のとおりである。

平成 21 年度発掘調査体制一覧表

香川県教育委員会事務局 生涯学習課	香川県埋蔵文化財センター
課長 春山 浩康	所長 大山 哲光
副課長・生涯学習推進グループ 課長補佐 武井 寿紀	次長 深谷 右（兼務）
副主幹 香西 としみ	秘書課長 深谷 右（兼務）
主任 林 照代	副主幹 林 文夫
文化財グループ 主幹（兼）課長補佐 藤野 史郎	主任 宮田 久美子
主任文化財専門員 森 格也	主任 古市 和子
文化財専門員 小野 秀幸	主任 広瀬 雄一
	主任 安藤 正
	調査課長 西園 達哉
	文化財専門員 木下 晴一
	文化財専門員 藤下 友子
	嘱託（土木） 砂川 哲夫
	嘱託（調査技術員） 木全 加味美

平成 29 年度整理体制一覧表

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課	香川県埋蔵文化財センター
課長 小柳 和代	所長 増田 実
副課長 片桐 孝浩	次長 森 格也
副主幹 松下 由美子	秘書課 課長 森 格也（兼務）
主任 石原 博文	副主幹 斎藤 政好
文化財グループ 課長補佐 片桐 孝浩（兼務）	主任 高橋 繩行
主任文化財専門員 信里 芳紀	主任 丸尾 麻知子
主任文化財専門員 乗松 真也	主任 岩崎 昌平
	主任 横井 陰史
	課長 古野 徳久
	主任文化財専門員 岸本 哲司
資料普及課	

## 第2章 立地と環境

### 第1節 地理的環境

#### 1. 地形環境

遺跡は、丸亀市飯野町東二に所在し、調査前の地目は水田等の耕作地であった。

遺跡が所在する丸亀平野は、東西約13km、南北約10kmの扇状地性の海岸平野で、香川県中央部に位置し、東より大東川、土器川、金倉川等の中小河川が北へ流下して瀬戸内海に流入する。平野部東西は、それぞれ瀬戸内海に突出した標高約400mの五色台山地と、標高約381mの弥谷山丘陵等の山塊によって囲まれ、また南縁は岡田・高屋原・仲南といった上位及び下位段丘が取り巻き、北の瀬戸内海に開けた地形環境を呈する。また、平野部内には標高200～400m程度の中小独立丘陵が散在し、これらの基底部は領家花崗岩類となり、頂部付近には讃岐岩質の安山岩が分布する。遺跡は平野東部、ビュート状の山塊である標高421.9mの飯野山の北西麓、土器川右岸の標高約12mの平地上に立地する。

土器川は、徳島県境に近い仲多度郡まんのう町勝浦の讃岐山脈に水源を有する、幹川流路延長約33km、流域面積127km<sup>2</sup>の本県唯一の一級河川である。丸亀平野は、主に土器川の營力によって形成され、河口から約19km上流のまんのう町常包附近を扇頂部として北西方向に開ける。土器川は、水源から河口までの距離が短く、中～下流域の扇状地部の平均勾配も約7.4%と急で、洪水時には短時間に一気に河口まで到達する急流河川として知られる。また、流域平野部の地盤高と河床面との高低差の乏しい天井川であり、頻繁に洪水が発生して流路が定まらず、現在の流路は江戸時代頃に固定されたと伝えられている。

さて、第2図は遺跡周辺の現地表面の微起伏を、国土地理院が提供する基盤地図情報（数値標高モデル）の5mメッシュDEMを用いて、10cm等高線で表現した図で、等高線の描出には株式会社CUBIC製の作図ソフト「造構くん」を使用し、微細な部分は補正したものである。第3図は、第2図をもとに遺跡周辺の微地形について分類したものである。平地部全面において、埋没河川の痕跡と考えられる、不規則な帯状の崖地が網目状に分布しているのが確認されるとともに、遺跡の北方や西部の土器川沿いの部分では、比高0.5～1m程度の低い弧状の崖面を形成して、崖面以東の平地部と比較して地表面高が約0.5～1m低いことが確認される。この低地部分は、土器川が蛇行した痕跡で、古代末頃の「完新世段丘」（高橋1990）により形成された「氾濫原面」として理解されている（木下1991・1995）。遺跡南西部では崖面が不明瞭だが、これはシートバー堆積物により氾濫原面が一部覆われているためと考えられる。崖面上位の平地面を「段丘1面」とする。なお、段丘1面と氾濫原面の旧河道は不連続であることが確認できる。

また、本遺跡1次調査区（以下、昭和63年度調査、香川県埋蔵文化財調査センター1996を第1次調査とし、本報告を第2次調査とする）での発掘調査の結果より、段丘1面の旧河道は弥生時代～古墳時代にかけて流下し、古代には埋没過程にあること、氾濫原面で検出された旧河道（SR01）は14世紀段階に流下していることが明らかとなっており、段丘1面の形成が古代末頃とする木下晴一氏の解釈と矛盾しない。

#### 2 赤山川

本遺跡調査の契機となった赤山川は、東西約 550 m の振幅をもって大きく蛇行しながら、土器川東岸の平地上を北に流下する、延長約 3.5 km の土器川支流の一つである。氾濫原面に水源を有し、緩やかに蛇行しながら北流し、遺跡南方で大きく東に屈曲して、第3図に示したように微高地を横断して段丘1面上を北流し、遺跡北方で再び西へ屈曲して氾濫原面から土器川へと合流する。比高差のある段丘面と氾濫原面を貫流する、自然河川としてはやや不自然な流路を辿る。段丘1面上では、その流路方向は概ね条里型地割の方向に合致して直線的に配される点も、自然の流路とは相容れない。

赤山川には多くの小規模な支流が合流するが、いずれも平野部上に構築された出水と呼ばれる土器川伏流水の農業用の揚水施設をその水源とし、さらに条里型地割に沿って配されていることから、それらは人為的に開削された用水路であることに間違はない。おそらく赤山川は、本来は氾濫原面を流下していた、旧土器川の網状流路の一つであったものが、時期は不詳だが段丘面上に構築された用水路へと人為的に接続された結果、現在の流路となった可能性が考えられる。おそらくそれは、赤山川北方の飯野町西分地域の段丘面上の耕地への給水を、より豊富な赤山川の水量で賄うことを目的としたものであつたと考えられる。

本遺跡の発掘調査で明らかとなつた古代の溝は、いずれも残存深 0.5 m 以下、底面標高も 11.2 m 以上と浅いことが指摘できる。段丘1面上を流下する旧土器川の支流等より直接取水し、用水路として利用していたのであろう。一方、中世以降には SD2003 や SD2015 等、残存深 0.7 m 以上、底面標高 11.2 m 以下と、一定の深度を有する溝が出現する。一概に溝の規模のみで断定することは困難だが、既述した古代末頃の河床面の下刻と運動した可能性も考えられよう。また、段丘面上には、遺跡南部を中心に条里型地割に合致した埋没河川（第3図流路 b）が認められるが、これは段丘面の形成により放棄され埋没した、古代基幹水路であった可能性は高い。

さて、同様な大型幹線水路は、飯野山東麓大東川西岸の川津川西遺跡や東坂元秋當遺跡にも認められる。その開削時期は 8 世紀代に遡り、11 世紀代には廃絶していたことが調査により明らかとなった。開削初期には段丘面上を流下する旧大東川を水源としていたが、河床面の低下により徐々にそれが困難となり、中世以降新たに上流に大窪池が築池され、現在の上井用水・西又用水へと改修された可能性が考えられる（蔵本 2008）。

同様に土器川左岸でも、大型幹線水路として古子川があげられる。佐藤竜馬氏はその開削時期を 10 世紀代以前とし、その整備には「小地域の開発者相互の結託ないしより上位の権力の介在」の必要性を説く（佐藤 2000）。

完新世段丘の形成は、既存の灌漑施設に大幅な変更を強制し、より広域的な地域的統合や開発領主と呼ばれる新規指導者層の確立を招いたことが想像される。

## 第2節 歴史的環境

遺跡の立地する丸龜平野北東部地域では、主に大東川流域を中心に発掘調査が実施され、土器川右岸域では調査例は乏しく、実態のよくわからない遺跡が多い。以下、これまでの調査知見や研究等より、周辺地域の歴史的な変遷について概観する。

### 旧石器時代



第2図 遺跡周辺の10cm等高線図

当該期の遺跡は、坂元神社遺跡と飯野山西麓遺跡が知られている。飯野山西麓遺跡では翼状溝片1点が採集され、坂元神社遺跡の詳細は不明である。いずれも飯野山の山麓ないしは中・高位段丘面上に立地し、これらの地形面では他にも当該期の遺跡が所在する可能性が想定され、今後の調査の進展に期待される。

#### 縄文時代

当該期の遺跡は知られていない。大東川流域では、下川津遺跡や川津川西遺跡で、晚期突帯文期の遺物が出土しており、土器川右岸域でも平地部の調査が進展すれば、当該期の遺跡が確認される可能性が考えられる。

#### 弥生時代

中期の溝が、本遺跡1次調査区で確認されている。青ノ山山頂遺跡と飯野山山頂遺跡は、いずれも中期後葉の高地性集落として知られるが、発掘調査は実施されておらず、詳細は不明である。そのほか、藤高池遺跡や柳池遺跡で当該期の遺物が採集されており、平地部には多くの遺跡が今後発見される可能性がある。また、飯野山西麓遺跡からは、後期の竪穴建物9棟のほか、溝や段状遺構が確認されている。竪穴建物には、径10mの大型建物や焼失建物も確認されている。山棲み集落と考えられるが、平地部の集落との関係については、今後の検討課題であろう。

#### 古墳時代

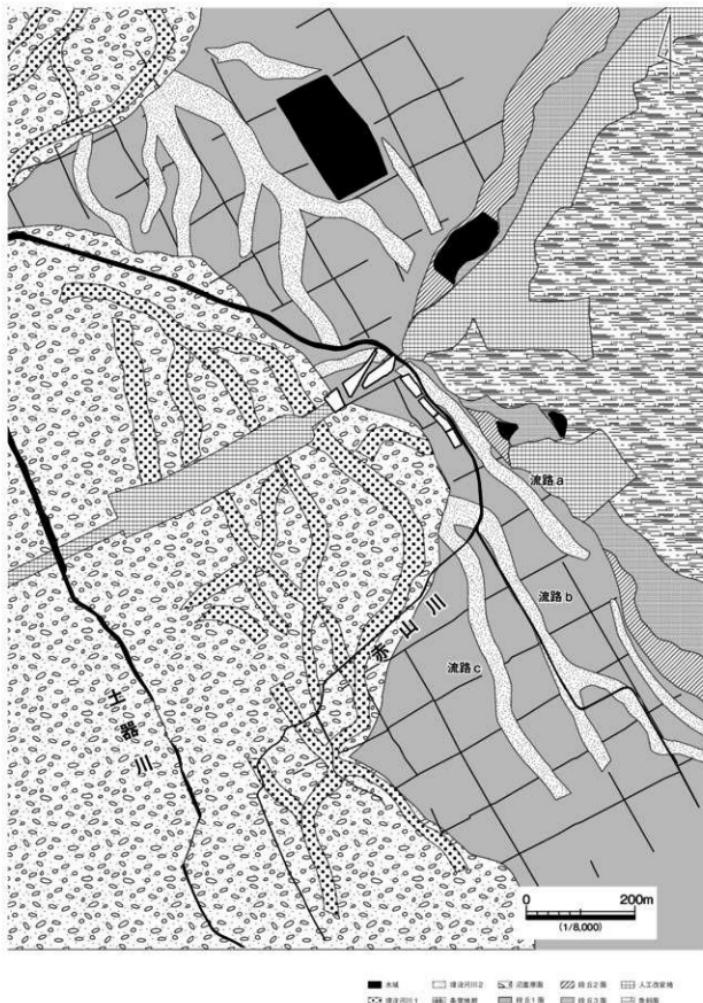
前期古墳としては、青ノ山南西麓の吉岡神社古墳がある。全長55.6mの土器川下流域唯一の前方後円墳で、南北主軸の竪穴式石室から、銅鏡16点、鉄鏡4点、刀子片、ヒスイ製勾玉1、碧玉製管玉1、土師器直口壺2などの副葬品が出土した。また、江戸時代の乱掘時に筒形銅器の出土が知られているが、現存しない。被葬者は、土器川河口部の流通拠点を掌握した首長層と考えられる。また、飯野山西麓では数基の箱式石棺墓が知られており、出土遺物等詳細は不明ながら、前～中期前葉に築造された可能性が考えられる。

本地域では、明確な中期古墳は知られておらず、後期に多くの古墳が築造される。まず、飯野山西麓の飯野東分山崎南遺跡では、V期1段階（蔵本2016）の円筒埴輪が出土しており、近接して中期末～後期前葉の古墳が所在した可能性が想定される。後期後半には、青ノ山や飯野山を中心に多数の横穴式石室墳が築造される。盟主墳は青ノ山古墳群にみられ、玄室長4mクラスの竪塚古墳（青ノ山7号墳）と、宝塚支群4号墳が知られている。飯野山西麓1・2号墳は、いずれも玄室長3mクラスの横穴式石室墳で、須恵器や玉類のほか、馬具等の副葬品が出土した。

生産遺跡には、TK209～TK217型式併行期の須恵器を焼成した青ノ山1号窯がある。集落遺跡は知られていないが、本遺跡1次調査区からは当該期の溝が検出されている。

#### 古代

遺跡周辺は、鞠足郡二村郷とされる。集落遺跡は確認されていない。本遺跡1次調査区SD21は正方に配された直線溝で、8世紀後葉～9世紀前葉の須恵器が出土する。一方、同1次調査区SD29は、条里型地割に合致する坪界溝で、11世紀代の黒色土器碗が出土している。本地域における条里型地割



第3図 周辺地形分類図

の施工は、丸亀平野の他地域よりもやや遅れた可能性が考えられる。なお、鶴足郡は八条まであったと推定（高重1965）され、金田章裕氏の丸亀平野の条里復元案（金田1988）の鶴足・那珂郡境を八条西端として折り返すと、SD29は五条と六条の条界溝となる可能性が高い。この点は、SD29と近接した位置に開削されている現水路が、東二瓦礫と東分字神谷の字界となっている点とも関係して興味深い。

法楽寺跡は、出土瓦から古代に創建された寺院跡と考えられ、近接する本村東遺跡からは古代の遺物が採集されている。

## 中世

中世には、大東川河口部の宇多津に守護所が置かれたことから、遺跡の所在する二村郷は讃岐の政治的な中枢地域に近接した位置を占めるようになる。

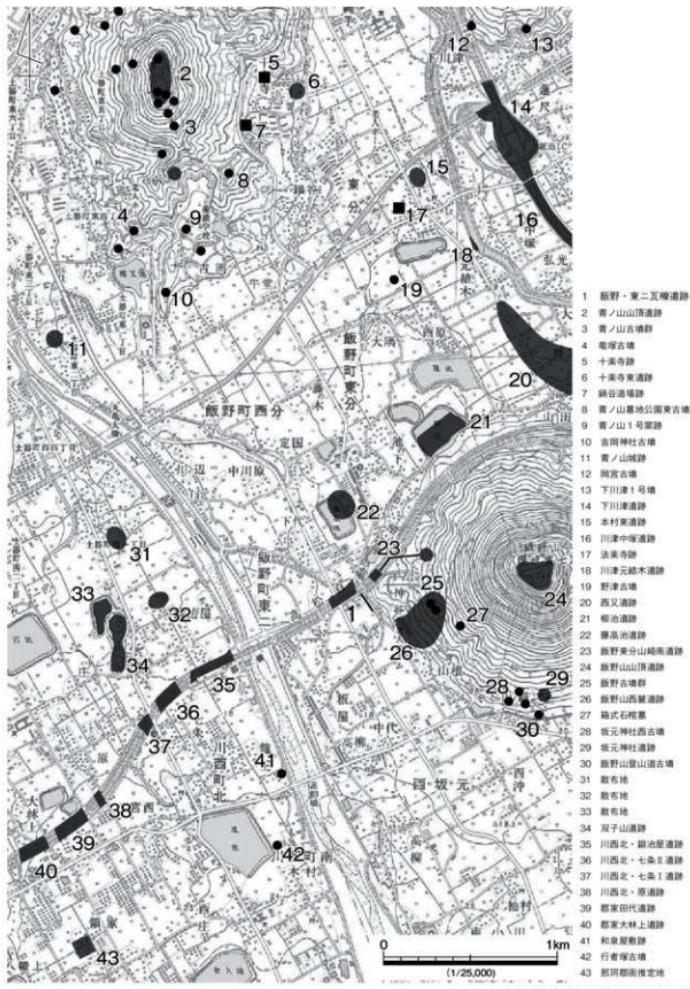
中世前半期の二村郷については、「泉涌寺不可棄法師伝」等の史料が残されており、田中健二氏（田中1987）や佐藤竜馬氏（佐藤2000）により、現地比定や政治的動向についての検討がなされている。

まず、田中氏は二村郷内に立荘された二庄村について、「法相宗の中興である笠置山の貞慶が元久年間（1204～6）に興福寺の光明皇后御塔領として立荘したもので…二村郷の七・八両条内の荒野を地主から寄進させることにより」成立したのであり、またその立荘には、当時の讃岐国の大守・知行主藤原良経が深く関与したこと、さらに嘉祥三年（1227）には、二村郷七・八両条内の見作（耕地）部分については、公領のまま泉涌寺へ寄付されており、「泉涌寺不可棄法師伝」にみえる泉涌寺の「仏像燈油以下寺用」に充てられた「二村郷内外水田五十六町」がそれに相当すること、こうして成立した二庄村と二村郷は、「同一の地域を地種によって分割したもの」であるため、「両者が混在し」、実際に「領有するうえで具合が悪いため」、仁治二年（1241）に「見作と荒野との種別を問わず」、七条は親康（姓不詳）領（公領）とし、八条は藤原氏女領（興福寺領）とする「和与」が締結されたこと 등을明らかにした。

また、これら二庄村の莊域について、「二庄村の莊域は地域的には二村郷七・八両条内の郷域と重複し…その中心地は、…「春日神宮」の所在地」との前提から、昭和十三年刊行の『香川県神社誌』に掲載された、現丸亀市川西町宮西の所在する春日神社（旧村社）を同宮と想定する。また、その氏子の分布は旧西二村であり、「土器川の左岸に限られる」ことや、近世の字名「西庄」の分布等により、「興福寺領や泉涌寺領となった二村郷七・八両条とは、二村郷のうち土器川の左岸の地域、すなわち近世の西二村の地であった」と現地比定を試みる。

一方佐藤氏は、近代の字や近世の免を週邇的に検討し、さらに七・八両条の条界を現地形から明らかにすることにより、二庄村と二村郷の現地比定を試みる。本遺跡に關係する公領二村郷に関しては、仁治二年（1241）僧戒如意書状案（九条家本「振鈴寺縁起」紙背文書）「七条以東惣当郷内併親康領也」や、文和三年（1354）後光嚴天皇綸旨（泉涌寺文書）「讃岐國七条村并二村附四ヶ名」との記載より、「七条分以外（以東）の二村郷内も親康領（泉涌寺領）に含まれていた」可能性を指摘し、土器川西岸域に限定されるとする田中氏の上述の見解とは異なる案を提示する<sup>(21)</sup>。佐藤氏の案に依れば、本遺跡は泉涌寺領（公領）に含まれていた可能性は高い。

さて、上述の13世紀以降の展開であるが、興福寺領二庄村については、暦応四年（1341）興福寺衆徒申状案（東京大学史料編纂所蔵写本「興福寺別當次第」紙背文書）を最後に史料上は確認できず、南北朝期に消滅したと考えられている。一方、泉涌寺領は文和三年（1354）に同寺へ安堵された後、応仁の乱に際し同寺が焼亡すると、幕府により後花園院の仙洞御料所として、甘露寺親長に預け置かれ、



第4図 周辺遺跡分布図

さらに文明二年（1470）に鞍馬寺へ寄進されたようである。なお、こうした公領についても、実体としては国人や守護被官が代官職を請け負っており、荘園の代官請負制と同じ支配関係に置かれていたことが明らかにされている（田中 1987）。

中世の遺跡としては、本遺跡の各調査区に散在する13世紀代の建物群があり、以後14世紀前葉には1次調査区の方形区画溝に囲繞された屋敷地へと集約されるようである。方形の屋敷地は20m四方と小規模で、既述した完新世段丘崖の縁辺に立地する。これら屋敷地の存続期間は、上述した親康領（泉涌寺領）とされた時期と概ね合致する点は興味深い。

川津元結木遺跡でも、方形区画溝に囲繞された12世紀代の屋敷地が検出されており、南北長は約55mと半町の規模を占めるとしている。しかし、北辺溝SD01は幅約0.85m、残存深約0.31mと、南辺溝SD10の幅約4.56m、残存深約0.71mと比して著しく小規模であり、北辺溝SD01は屋敷地内部の区画溝の可能性がある。この場合、屋敷地面積はさらに規模の大きなものとなる。藤高池遺跡では、詳細は不明ながら当該期の遺物が採集されており、本遺跡の屋敷地との関係等、今後の調査に期待される。鍋谷道跡は、浄土真宗本願寺派の西光寺の前身寺院とされる。西光寺縁起によれば、承元元年（1207）に法然の讃岐配流に伴い草庵を建立したのが始まりで、その後守護細川氏により伽藍の整備や寺地等が寄進され、それらが戦国期に焼失した後、天文十八年（1549）本願寺證如の弟子進藤長兵衛尉宣政（向専）により再興されたことを伝えるが、実際には向専により創建されたと考えられている。宇多津が天文十年（1541）頃までに、阿波の篠原雅楽助盛家の管下に置かれると、永禄十年（1567）や元亀二年（1571）に篠原氏による当寺宛の禁制が出されている。また、信長と顕如が争った石山合戦時には、天正四年（1576）に青銅700貫等の物資を本願寺に送っている（五月一三日下間頼廉書状）。

## 近世

近世には、東二村として高松藩領となり、寛永十七年（1640）の生駒領高覚帳で高二千二一二石余、寛永十九年（1642）の小物也是綿199匁3分・銀30匁（茶代）であった（高松領小物成帳）。

## 本文註

- 1 ただし田中氏の論文の記載からは、二村郷七・八両条に限った泉涌寺領については、土器川の左岸の地域に所在するととも読め、必ずしも公領全体を指示していない可能性も指摘できる。

## 参考・引用文献

- 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公团 1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第20冊 飯野・東二瓦塚遺跡』  
木下晴一 1991『条里型地割施工以後の微地形変化』『香川県地理学会会報』No.11, 香川県地理学会  
木下晴一 1995『遺跡の立地と環境』『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第16冊 川津二代遺跡』, 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公团  
木原薄幸はか編 1988『香川縣の地名』, 平凡社  
金田章裕 1988『讚岐の条里遺構』『香川県史』第1巻通史編, 香川県  
藏本哲司 2008『古代幹線水路について』『国道438号道路改築事業（坂山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 東坂元秋常道路1』, 香川県教育委員会  
藏本哲司 2016『出土埴輪の編年の位置関係』『国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1番 仲戸遺跡・仲戸東遺跡』, 香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局  
佐藤竜馬 2000『歴史的環境』『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第35冊 川西北・原遺跡・府中地区』, 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公团  
高重進 1965『讃岐の条里』『広島大学文学部紀要』第25卷1号, 広島大学文学部  
田中健二 1987『中世の鰐郡河津・二村両郷について』『香川史学』第16号, 香川歴史学会  
田中健二 1996『中世』『新編丸龜市史』自然・原始・古代・中世編, 丸龜市

## 第3章 調査の成果

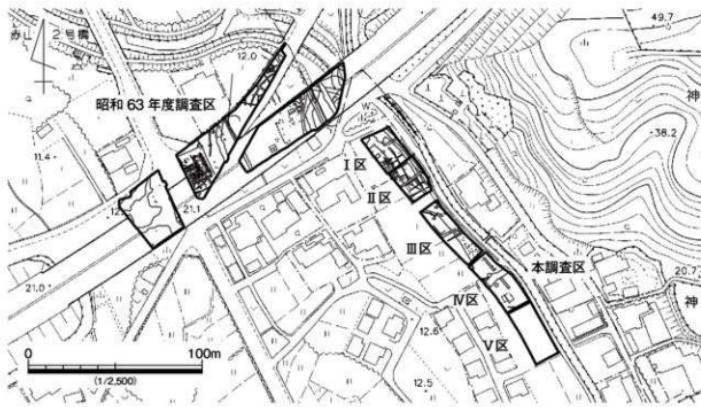
### 第1節 調査の方法

調査対象地は、東西幅11.9～17.3m、南北長約163.2mと南北に細長く、調査前は主に耕作地として利用されていた。したがって、調査地内を用水路や農道等が横断し、こうした工作物によって、調査区は大きく5ブロックに区分して調査を実施した。調査時に北より順に、それぞれI～V区の名称が各調査区に付されており、本書でもそれを踏襲する（第5図）。

調査は、直営方式により実施し、第1遺構面までは重機により掘削し、個別遺構は人力にて掘り下げを行った。Ⅲ・V区等では、第2遺構面まで重機で掘削し、遺構の検出・掘り下げを行った。また、第2遺構面の包含層や自然河川等も大半は重機により掘り下げた。したがって包含層や自然河川等では、接合不能な小片や帰属層位の不明な遺物が多い。

測量に要する基準杭は、業者に委託して設置した。調査に際してグリッドは設定せず、包含層を含め出土遺物については調査区や遺構単位に取り上げ、必要と認めるものについては、トータルステーションや写真により、出土位置や状態を記録した。大半の遺物は、遺構内での出土位置等の情報を欠き、その分布の粗密や投棄の単位等の詳細は不明で、以下ではそうした情報について触れることができていない。

遺構名は、調査時には各調査区単位に付したが、本書を作成するにあたり、すべて新たな番号を付して統一した。また、2次調査であることから、1次調査の遺構名と区別するため、遺構種別と番号との間に数字の2を挿入して表記した。遺構の種別については、調査時の担当者の所見を最大限尊重しつつも、調査時の記録から異なる解釈が導けるものについては変更した。



第5図 調査区割図

## 第2節 基本層序

基本層序の記録は、各調査区の壁面において行った。各区の記録には、層名の記載漏れや層序関係の矛盾等もあったため、以下で写真記録等を参考に可能な限り補填・訂正しながら記述する。なお、挿図については、報告書執筆者の一方的な解釈に陥らないよう、改変を行わず基本的に調査時の記録を提示した。

### I区（第6図）

I区は北壁と西壁で、層序の記録を行った。しかし、両壁間で層序の対応関係は確認できず、以下各壁について個別に調査所見を記載する。

まず、北壁では擾乱・現耕作土下に、9層に分層される堆積層（3～11層）が確認された。これらの堆積層については、時期や性格が記録されておらず、詳細は不明である。何らかの遺構に似た堆積を示す層序（4・5・7層）も認められるが、平面的な調査はなされていない。これら堆積層下で、溝SD2003（14・15層）と水田SZ2001（12・13層）を確認し、その検出面を第1遺構面とする。

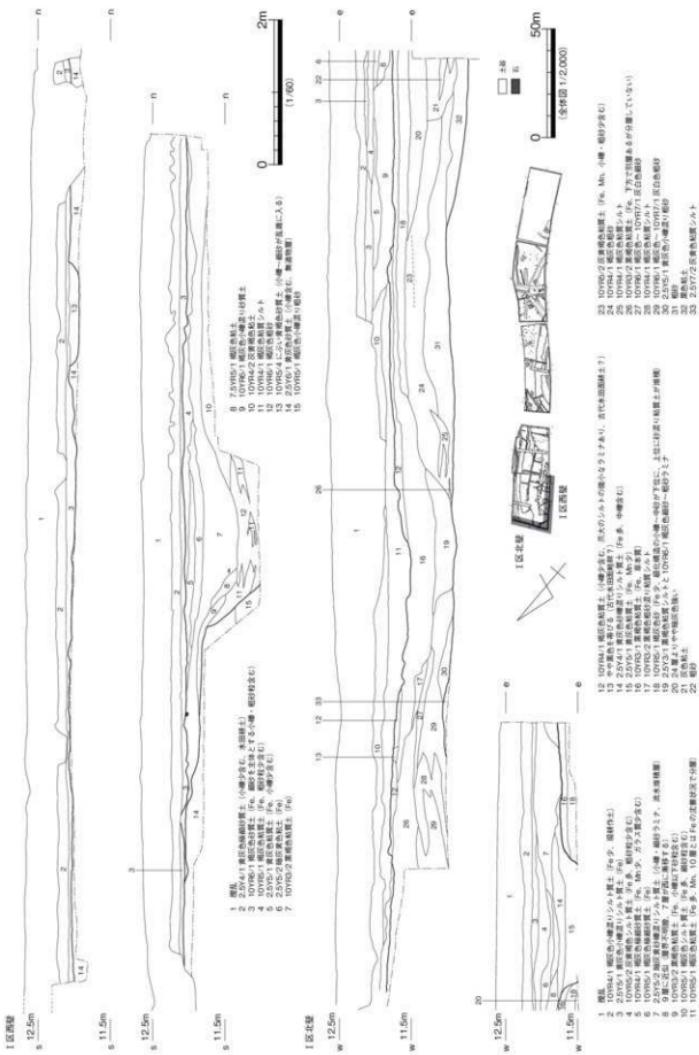
西壁でも、擾乱・現耕作土下で、褐色灰色砂質土の水平堆積層（3層）が認められた。堆積時期は不明で、北壁の堆積層との対応も明らかではない。しかし、調査区南西部では、本層下で無遺物層（14層）が露出するので、14層上面が第1遺構面となる。また、北壁と同様に遺構埋土と考えられる堆積層（13層）を認めるが、平面的な調査はなされていない。さらに、平面図に記載のあるSX2001については、西壁団に対応する堆積層の記録がなく不明である。

第1遺構面のベースは、粘質土や砂のラミナ堆積が認められ、自然河川SR2001となる。自然河川上面で、Ⅲ区より連続する溝SD2018を平面調査している。断面記録に同溝の埋土の記載がなく断定できないが、位置関係から西壁5～8層と北壁16・19層がそれと考えられる。しかし、溝の堆積層のうち北壁16層と西壁7層は、自然河川上面を広く包含層状に覆うように堆積し、平面調査の溝のプランと合致しない。おそらく各層は、溝埋土部分と包含層状堆積部分で細分され、後者は自然河川SR2001の埋土の一部であったのではなかろうかと想像する。事実、西壁7層は、上述したように西壁と北壁の連続が確實には検証できないが、同レベルで堆積していたと仮定すると、自然河川SR2001埋土の可能性が高い北壁20層に相当し、明らかに矛盾が生じる。なお、北壁19層は16層直下に堆積することから、SD2018の埋土と判断したが、隣接する24・29層と同じラミナ堆積層であり、西壁に対応する堆積が認められないことからも、SR2001埋土とした方がよいのかも知れない。なお、第1遺構面のベース層で検出したこれら溝と自然河川については、第2遺構面として以下記載し、溝と自然河川の堆積層間に包含層が介在する可能性を踏まえ、溝SD2018検出面を第2遺構面a、自然河川SR2001を第2遺構面bにそれぞれ帰属する遺構として報告する。

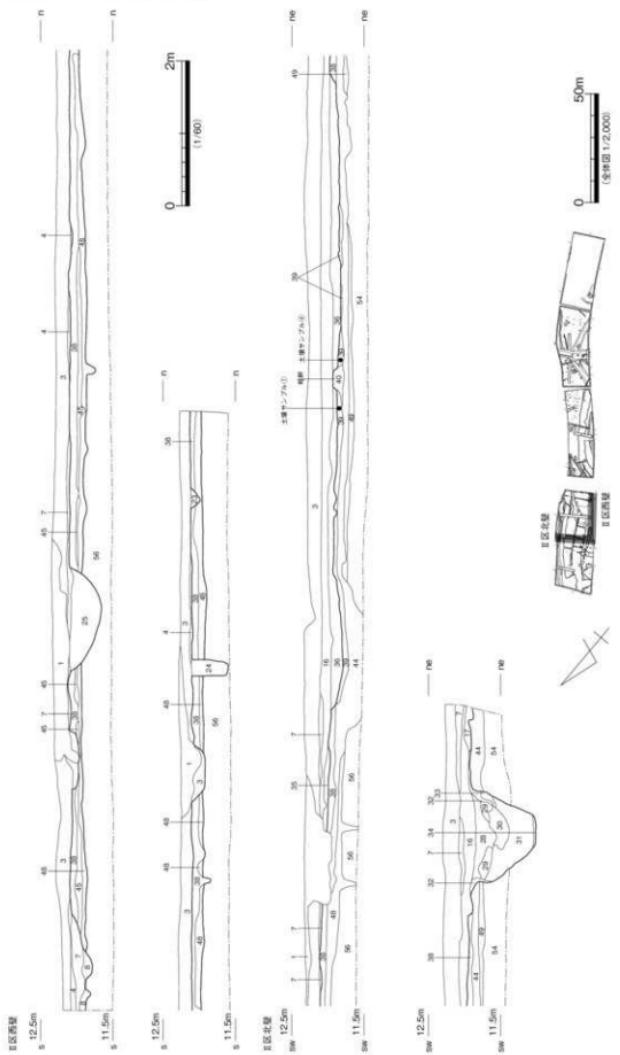
### II区（第7・8図）

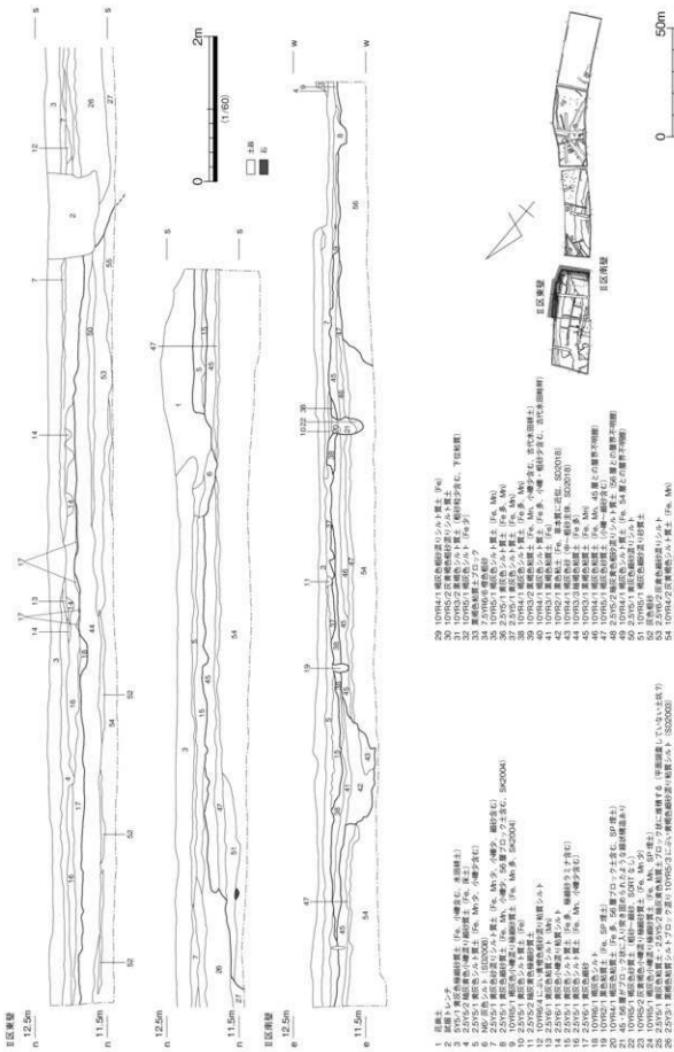
II区では、各壁面で土層序の調査を実施した。土層名が記載されていない層や、分層線が途中で途切れる層もあるが、調査記録を改変せずそのまま掲載する。

東壁において、現耕作土下に堆積する5層下で、近世溝SD2008（6層）が検出され、この面が近世以降の遺構面となる。6層上面に堆積した5層の内容については、SD2008の埋土であった可能性もある。



第6図 I区西・北壁土層断面図





また、本遺構面が他の3壁でどの層に対応するかについても、5層の堆積が東壁にしか認められず、記録からは判断できなかった。なお、調査時には、後述する中世遺構面まで重機で掘り下げて調査を実施しており、中世遺構面を第1遺構面として、以下記載する。

西壁では、現耕作土・床土層下で第1遺構面である中世の遺構面が検出される。北壁ではその間に2～3層(16・17・35層)、東壁では2～7層以上(5・7・13～17層)、南壁では1～2層(5・7・10層)の堆積層が分層される。これら堆積層の時期・性格については、水平堆積している層も多く、中世以降の旧耕土層が多く含まれると考えられる。また、遺構埋土の可能性を考えられる堆積層も認められるが、平面調査はなされておらず、断定できない。第1遺構面では、掘立柱建物SB2001、土坑SK2004、溝SD2003等の遺構を検出した。また、古代の水田面とされるSZ2001の南北畦畔の上面を、本遺構面で検出している。

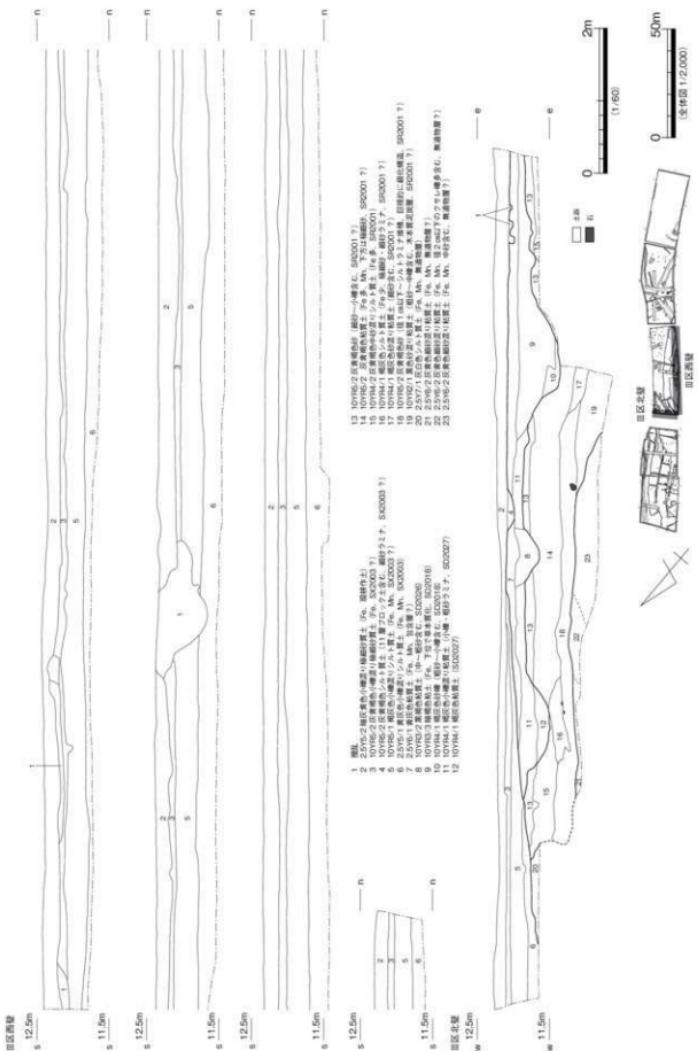
古代の水田面SZ2001は、黒褐色粘質土(北壁39層)を耕作土とし、盛土による畦畔(同40層)によって複数の田面に区画される。北壁では39層は後述する溝SD2018(同44層)の上面で途切れるが、調査区北壁の写真記録から判断して、同38層と44層の一部が本層に分層され、おそらく調査区西端まで耕土層は連続していたとみられる。38層は、西壁では水平堆積が確認され、水田耕土層と矛盾はない。38層と39層では、底面のレベルは10cm程度38層が高く、39層東側でもやや高い位置に38層が堆積していることから、本来は39層の水田面を最深部に両側にやや高い田面が展開する、緩やかな棚田状を呈していたとみられる。なお、調査区南壁でも38層の堆積は認められるが、西壁や北壁と同一層としてよいかは断定できない。本水田遺構も、時期は遡るもの、以下で第1遺構面の遺構として記載する。

上述した水田耕土層下で、既述したI区より連続する溝SD2018(南壁42・43層、北壁44層)を検出した。南壁では、本溝上面に黒褐色粘質土の薄いレンズ状堆積(41層)を認めることから、I区同様に本溝検出面を第2遺構面として記載する。北壁では、44層はI区同様東に広く包含層状に堆積する。本来は、2層に細分されることは既述のとおりである。また、本溝のベースとなる45～55層は、自然河川SR2001の埋土と考えられる。

### III区(第9図)

III区は、調査区北・西壁で層序の記録がなされている。現耕作土(2層)下で溝(4層)が記録されているが、本遺構については平面的な調査はなされていない。また、3・5層の堆積時期については、記録がなく不明である。その下位の6層は、中世の落ち込みSX2003の堆積層である可能性が想定されており、上位の5層も6層に連続して堆積していることが、北壁の断面図から読み取ることができ、5層もSX2003の埋土である可能性は高く、同様な理由から3層もSX2003の埋土であると想定できる。とすれば、現耕作土層直下で中世以降の遺構面(第1遺構面)となる可能性が考えられる。同一遺構面で、溝SD2006が平面的には調査されているが、該当する堆積層が北壁土層図には記録されていない。なお、本遺構面に帰属する遺構として、他に土坑や柱穴群が確認されているが、層序図に記録がなく、正確なところは不詳である。第1遺構面の標高は、調査区北壁部分で12.0～12.1m前後であった。

上述したように理解すれば、7層は中世以前の包含層であり、7層下面で検出した溝SD2027等は、中世以前に位置付けられ、I・II区同様第2遺構面aとして報告する。8層はSD2026の埋土、9・10層はSD2018の埋土、11・12層はSD2027の埋土としてそれぞれ記録されているが、北壁での記録から



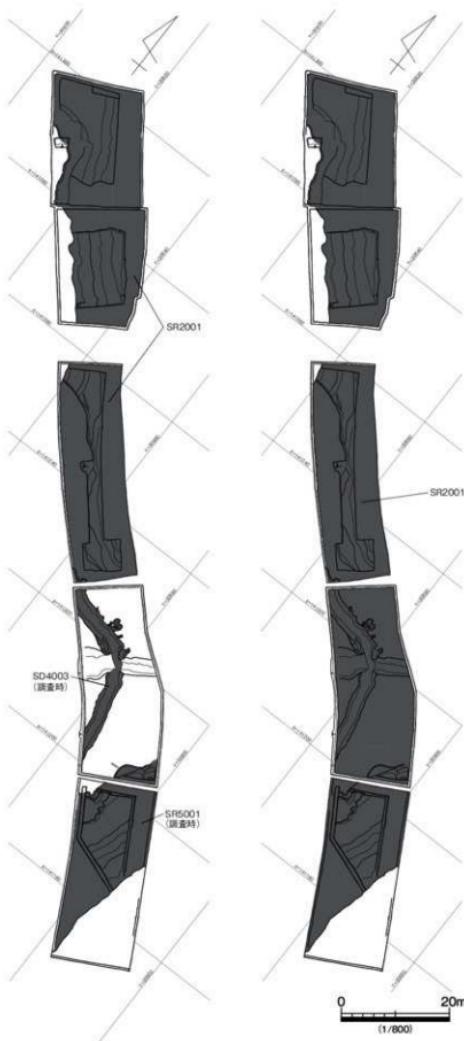
第9図 III区西・北壁土留断面図

11層は東へ広く包含層状に堆積し、その上面よりSD2018・SD2026が開削されている。平面図では、SD2027はSD2018から分岐した溝として調査されており、北壁の土層図と平面記録を整合的に解釈することは、不可能ではないものの、それを実証・補完する調査記録は作成されていない。11層は、本来はSD2027の埋土と包含層状堆積部分とで、少なくとも2層に細分されると考えるのが妥当な解釈と考える。13層（本来は11層も含むか）以下が、第2遺構面b自然河川SR2001の埋土となる。

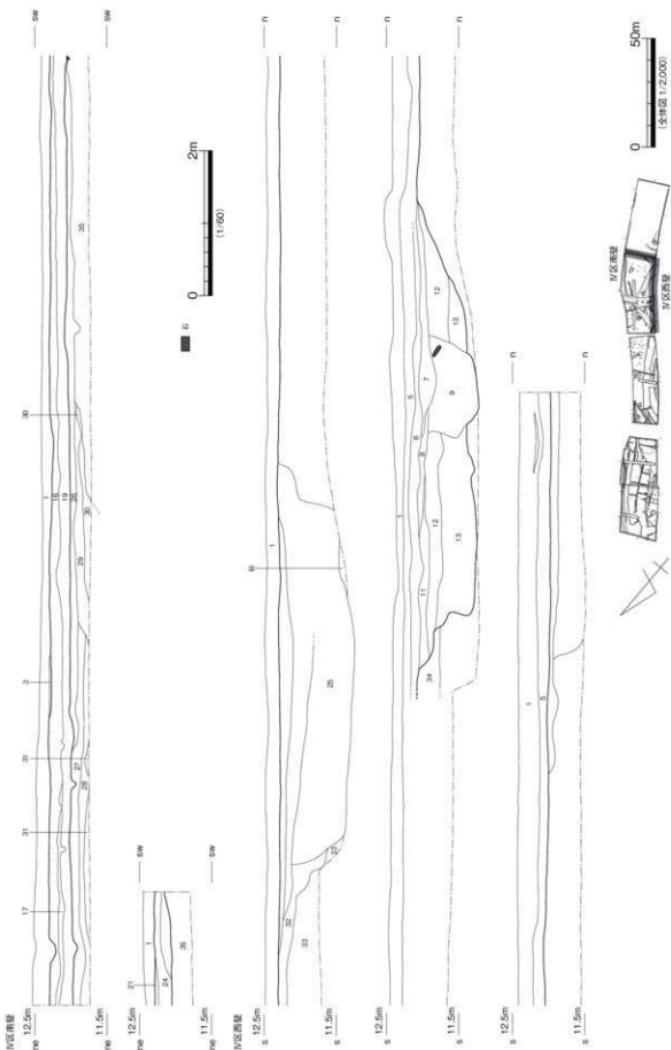
#### IV区（第10～12図）

IV区では、調査区各壁面で基本層序の記録を行った。調査区東壁では、現耕作土（1層）及び床土（5層）、あるいは床土ないしは旧耕作土と考えられる4層下で、中世の遺構である溝SD2015（7～13層）と落ち込みSX2003（14・15層）を検出し、本遺構面を第1遺構面とする。第1遺構面の標高は12.0～12.2m前後である。

第1遺構面のベースである16～19層下で、溝SD2029（20層）を検出した。北・東壁の調査記録から、20層は埋土を含んで調査区北半部に広く包含層状の堆積が確認され、20層下面を第2遺構面として以下報告する。本遺構面では、他に溝



第10図 調査時記録（左）とSR2001平面配置（右）



第11図 IV区南・西壁土層断面図

SD2031 等が平面調査されているが、本構造埋土とされる堆積層は、東壁では確認できず、詳細は不明である。また、溝上面に堆積した 16 ~ 19 層については、堆積時期等詳細は明らかではない。

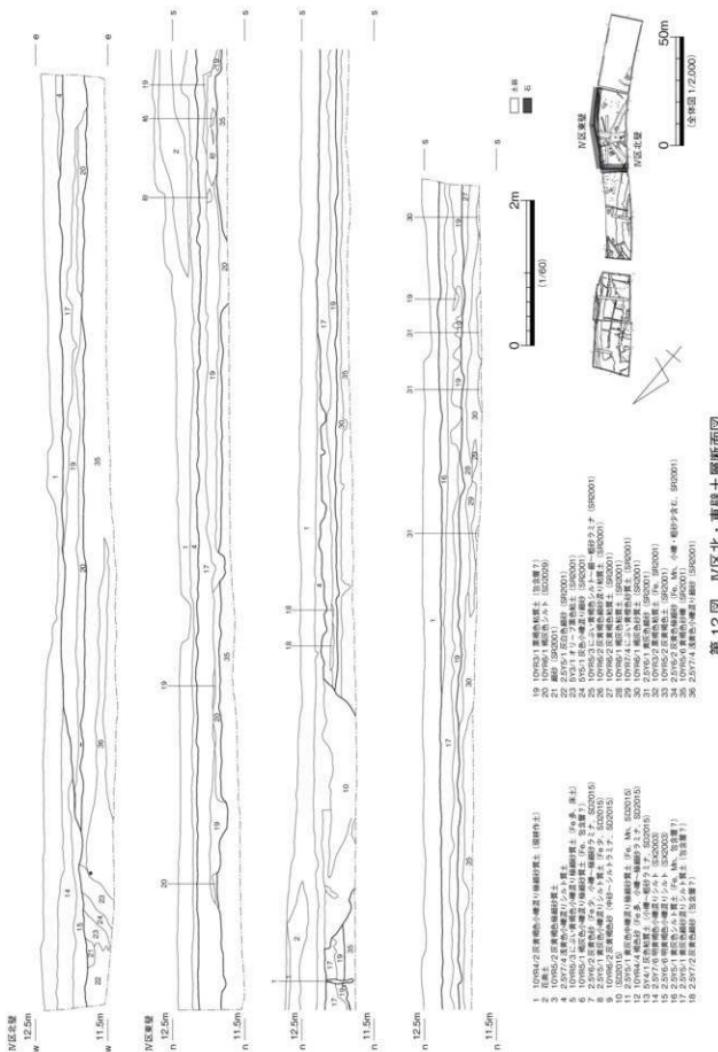
Ⅲ区以北で確認された SR2001 は、本調査区では不明である(第10図左)。I ~ Ⅲ区の調査記録からは、SR2001 が本調査区にも流下していなければならない。一方、Ⅳ区南東隅部では第10図左に示したように、別の自然河川 SR5001 (調査時) が調査されている。

SD4003 (調査時、第10図左) の埋土の写真記録からは、ベースとなる土層と同一土層をあえて溝埋土として分層している可能性が推測され(図版15)、シルトと砂のラミナ堆積からなるその埋土は、SR2001 の埋土と酷似する。写真記録からの判断ではあるが、SD4003 の埋土は、SR2001 の埋土の一部をとして間違いないだろう。さらに SD4003 の出土遺物は、多数の完形土器を含む古墳時代以前の資料に限られ(第15・16図)、SR2001 と出土遺物の点で時期差を認ることはできない。こうした事実からも、SR2001 が本調査区にも延長することは間違ないと判断した。

したがって、本書では SD4003 は溝ではなく、SR2001 の埋土の一部として報告する。その場合、SR2001 は本調査区を南北に流下したこととなり、SR5001 との関係が課題となる。SR2001 の平面配置について、写真等の調査記録より検討を試みたが、実証的に復元することは困難であった。本書では、両自然河川の重複関係の詳細については保留し、第10図右に示すように一連の流路として報告し、将来隣接地の調査による検証を待ちたい。なお、挿図に示した堆積層については、上述した理解と相反する部分があるが、そのまま掲載する。なお、調査区全面に広く水平堆積している 17・19 層については、層下面に耕作痕の可能性のある不整合面が認められ、自然河川の埋土の一部を利用した耕土層の可能性も考えられ、I・II 区の水田 SZ2001 が本調査区にも延伸する可能性も想定されるが、明確な畦畔等の遺構は確認されていない。

#### V区 (第13図)

V区は、西壁と南壁で基本層序を調査・記録した。現耕作土(1・2層)下で最大5層に細分されるシルト質土や粘質土の水平堆積層(3~7層)を確認したが、これらの堆積層の堆積・性格については記録がなく不明である。なお調査記録からは、旧耕作土等である可能性が高いと考えられる。これら堆積層下で、溝 SD2032(8~10層)を検出した。これを第1遺構面とするが、SD2032 の平面プランは不明瞭で、出土遺物も弥生土器の小片等が少量出土したのみであるため、自然河川 SR2001 の堆積の一部である可能性は皆無とは言えない。11~13層は SR2001 の堆積層と解釈される。



第12図 N区北・東壁土層断面図



第13図 V区南・西壁土層断面図

### 第3節 遺構・遺物

#### 1 弥生時代～古墳時代前期

当該期の遺構としては、第2遺構面bで検出した自然河川SR2001がある。その他に、当該期の遺物のみ出土する遺構も一定数認めるが、遺構面やSR2001との関係より、全て後出する時期の遺構と考える。

##### 自然河川

###### SR2001（第14～17図）

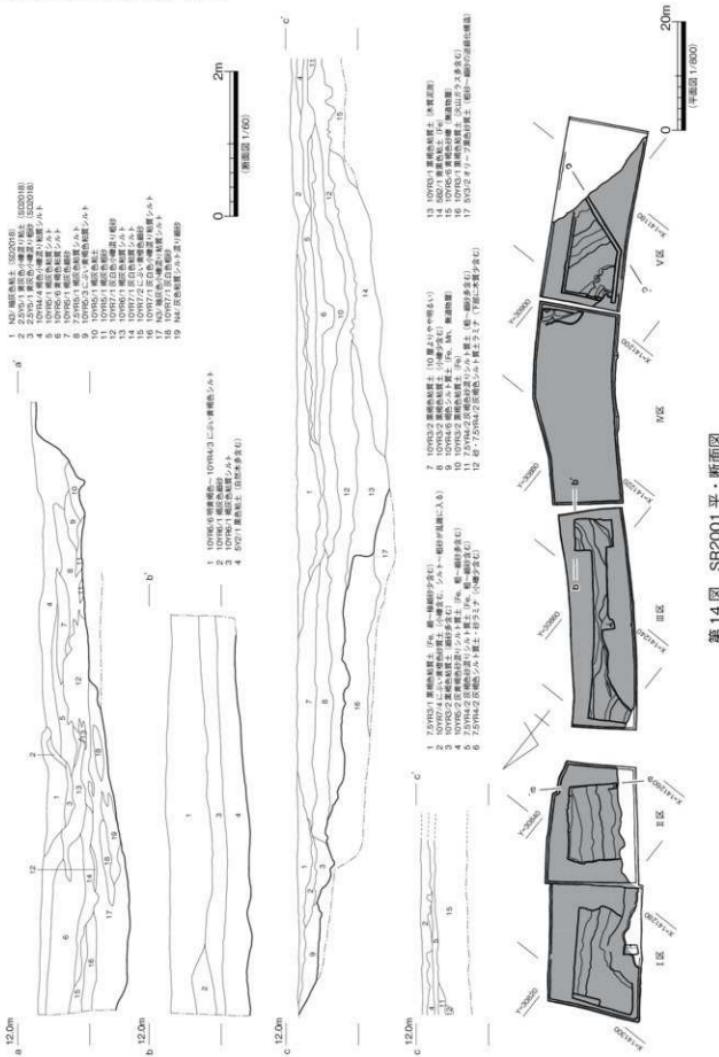
調査区を南北に、緩やかに蛇行しながら流下する自然河川である。検出面幅17m以上、残存深1.2～1.3m、断面形は皿状ないし逆台形状を呈する。埋土は、第14図に示した3か所のほか、前節で報告した各調査区壁面で記録されている。土層図より、4～16層程度に細分され、上位にシルトが下位にシルトと砂のラミナ堆積が確認され、流路としての機能が喪失した後、緩やかに低湿地状を呈して埋没したと考えられる。

遺物は、コンテナ4箱程度と少ない。また、一部の資料を除いて、接合できない小片化した資料が多い。上述したように、埋土は複数層位に細分されているが、出土遺物で帰属層位が判明したものはV区出土の一部の資料に限られ、大半の遺物の出土位置は不明である。II区やV区で記録された土層図からは、複数の流路の重複の可能性が推測され、後述する遺物の時期幅は、そうした複数時期の流路の埋没を反映していると考えられる。出土遺物のうち、53点の資料について図示した。図示した以外には、土器小片のほか、サヌカイト剥片や楔形石器等が少量出土している。

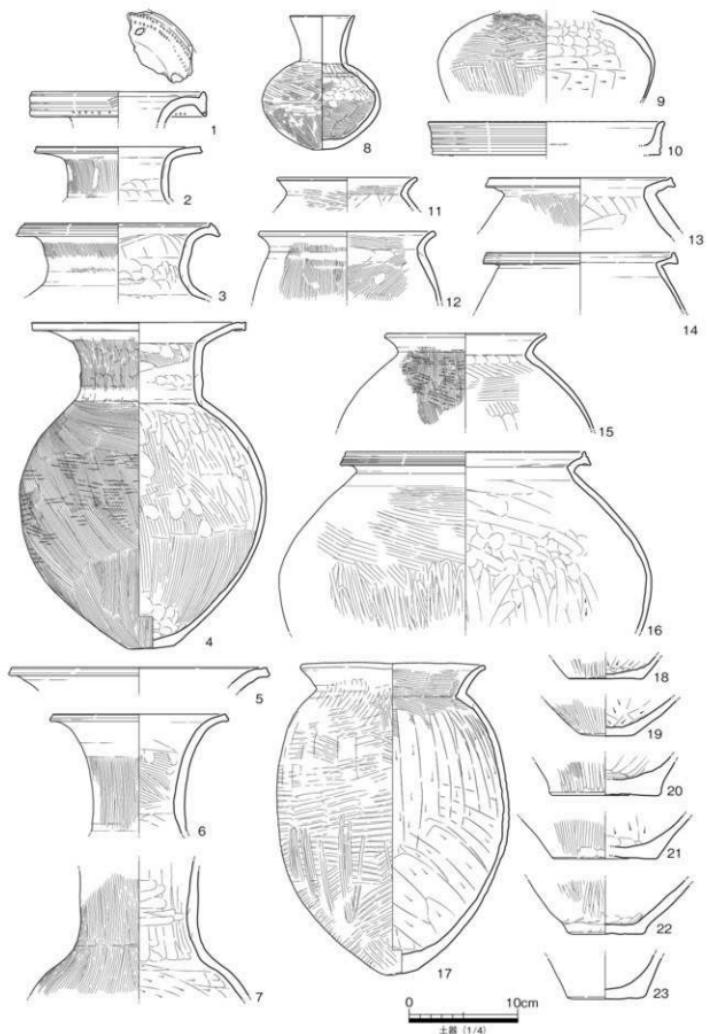
1～5は、弥生土器広口壺である。1の口縁部は、凹線文や斜線文、刺突文等で装飾される。中期後葉に位置付けられる。中期の遺物は、本資料を含め少數出土しているが、いずれも小片であり、混入の可能性が高い。2・3は、口縁端部に数条の凹線文を施すが、頭部は無文化しており後期後半位に位置付けられよう。4は、口縁部の一部を欠損する以外は完形である。小さな平底を呈するが、体部は球胴化し終末期前に位置付けられる。5も、同様な広口壺の口縁部小片とみられる。6・7は同長頸広口壺。後期中葉前後に位置付けられる。8は完形の小型直口壺。辛うじて小さな平底を呈する。9は、細首壺の体部片。胎土中に角閃石細粒を多量に含む下川津b類土器で、高松平野香東川下流域からの搬入資料である。10は在地系譜の二重口縁壺の口縁部小片で、外面には5条の凹線で飾る。古墳時代前期前葉にまで下る可能性がある。

11～17は同壺である。11は、内面頭部までケズリ調整を施すタキ壺で、製作技術は他地域に系譜を求める。17は砲弾型の体部を有する粗製のタキ壺で、完形品である。底部は辛うじて小さな平底をとどめる。15は球胴化した体部に、口縁端部を小さく上方へ摘み上げる。終末期前に位置付けられる。14・16の口縁部は強く折り返して開き、端部は上方14ないし上下16へ拡張して、端面に3条の凹線を施す。18～27は、弥生土器壺や壺の底部片である。25・27の体部内外面には煤等が付着し黒変する。安定した平底を呈する26は、中期に遡る資料である。

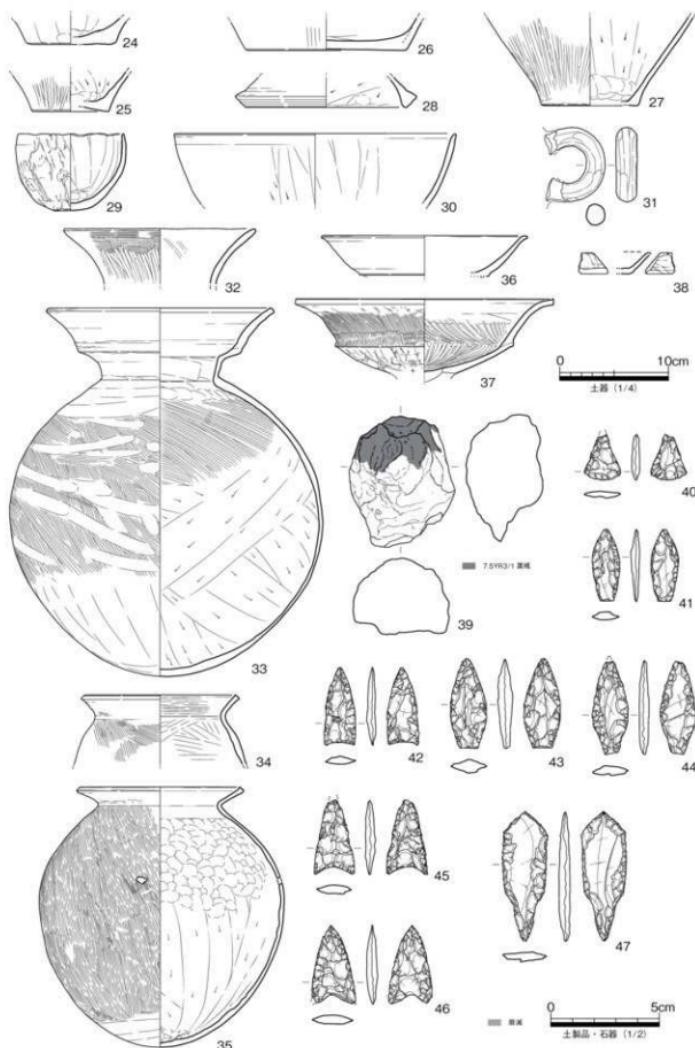
28は同高杯。本資料も下川津b類土器で、搬入資料である。29は同小型鉢。口縁～体部外面には多数の縦方向のクラックを認め、外型成形の可能性がある。30は同鉢。ボウル状を呈する中型鉢で、内面には赤色顔料が付着する。顔料については理化学的な分析を実施した。詳細は次章に譲るが、分析の結果水銀朱であることが判明した。31は半環状を呈する把手部分の破片で、形状より水差形土器とみ



第14図 SR2001平・断面図



第15図 SR2001 出土遺物実測図1



第16図 SR2001出土遺物実測図2

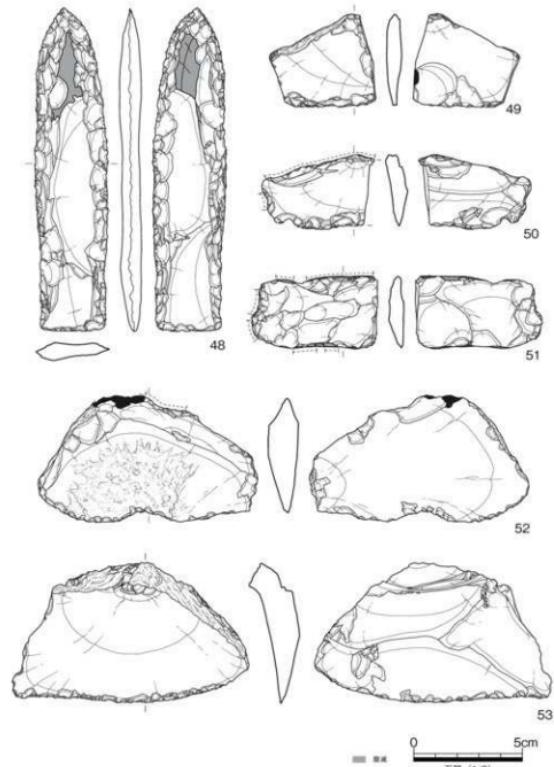
られる。

32～37は古式土器である。

32は直口壺の口縁部小片。33は二重口縁壺で、ほぼ完形で出土した。口縁部は大きく外反し、頸部の製作技法の点からも、在地系譜の壺とは異なる。

35は甕で、本資料もほぼ完形に復元される。体部に2箇所の焼成後に不定形小孔を穿つ。在地系譜の東四国系甕で、古墳時代前期前葉に位置付けられる。また、胎土中に多量の火山ガラスを含む。

36・37は、高杯の杯部片である。37の杯部下半外面には、多数のクラックを認め、それを消すようにハ

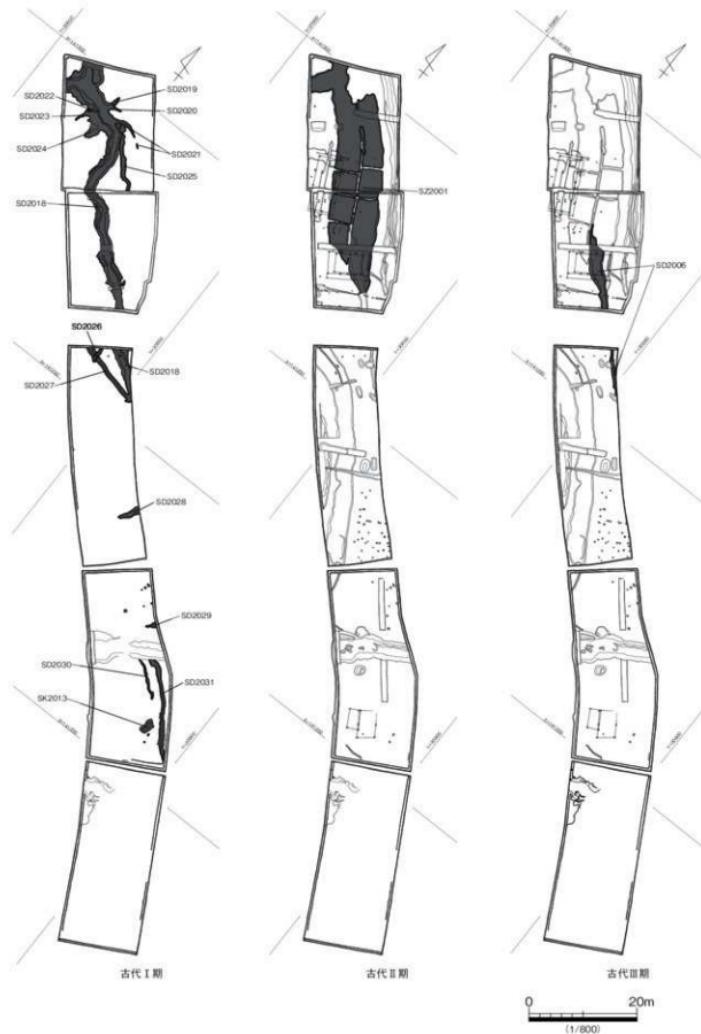


第17図 SR2001出土遺物実測図3

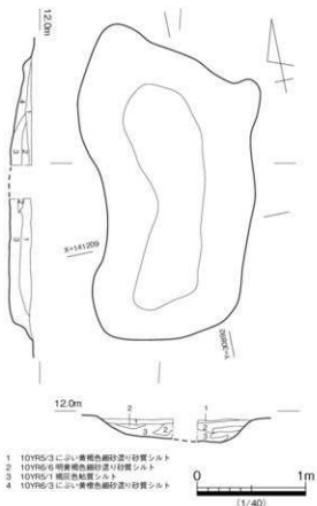
ケやナデの調整が加えられる。杯部下半のみ外型により成形された可能性がある。

38は、須恵器皿の小片。出土位置は不明だが、小片でもあり上位層の混入の可能性が高い。内外面火捺を認め、9世紀代に位置付けられる。39は用途不明の焼土塊である。図上半部は被熱により黒変し、一部にクラックを認める。炉壁等の可能性が想定される。

40～53は、サヌカイト製の打製石器類である。40～47は石鎌で、42の図左面の一部に磨滅痕を認められる。48は石椎。表裏面には、顕著な磨滅痕を認め、打斧等の転用品の可能性がある。50は、小型の打製石庖丁とした。側縁に浅い抉りを認め、上縁は敲打による刃潰しが認められる。51も、左図左縁に抉りが認められることから、打製石庖丁として図示した。しかし上縁と下縁には、強い磨滅痕が認められ、打斧等を転用した残核した方がよいのかもしれない。49は、直線状の刃部を有するスクレ



第18図 古墳時代後期～古代の遺構配置



第19図 SK2013 平・断面図

イバーとして図示した。背部に自然面を残す。52もスクリイバーで、側縁の一部と左図正面に自然面を残す。また、上縁部には敲打による刃濱しを認める。53は、下縁に使用痕を認める剥片で、背部には自然面を残す。

## 2 古墳時代後期～古代

第2遺構面aにおいて検出された遺構と、第1遺構面で検出された遺構のうち、出土遺物より当該期の遺構と考えられるものを報告する。第2遺構面aで検出された遺構を古代I期、第1遺構面で検出された遺構を古代II・III期として、以下報告する。当該期の遺構は溝を主体とし、土坑1基のほか水田遺構SD2001を検出した。なお、古代III期としたSD2006は、水田面上で検出したため小期を設定したが、その流路は古代I期のSD2018と完全に重複しており、SD2018を誤認した可能性もある。

### 土坑

SK2013（第19図）

IV区南東部第2遺構面aで検出した土坑である。長軸約2.63m、短軸約1.57mで、平面形は歪な隅丸長方形を呈する。残存深0.20m前後、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は4層に細分され、褐色系シルトが堆積し、堆積状況より最下層堆積後再掘削された可能性がある。

遺物は、弥生土器甕等の小片数点と、器種不詳の須恵器小片1点、サヌカイト剥片1点が出土したのみである。検出面や須恵器が出土していること等より、当該期の遺構の可能性を想定するが、出土した遺物の大半は弥生土器が占め、須恵器は混入の可能性も否定できず、年代的な位置付けについては課題を残す。

### 溝

SD2018（第20図）

III区北東部よりI区中央部第2遺構面aにおいて検出した溝で、南北両端は調査区外へ延長する。とくに調査区北部において、SD2019等の小溝が東西より合流するが、それらについては同時期のものか詳細は不明である。既述した自然河川SR2001上面より開削される。やや蛇行しながら北西方向に配され、流路方向より1次調査区溝SD31と一緒に遺構である可能性が高い。また、III区で後述するSD2027が西へ分岐し、I区北端部で西からの流路が合流する可能性がある。検出面幅1.15～4.51m、残存深0.35～0.45mで、断面形は概ね逆台形状を呈する。流路底面の標高は、南端部で11.38m、北端部で11.15mをそれぞれ測り、高低差より北へ流下する。埋土は南半2箇所で記録したのみだが、3～4層に細分され、いずれも上位に暗色系粘土～粘質土が、下位に水成堆積層である灰色系粗砂～砂礫が堆積する。

埋土の堆積状況より、改修の可能性も想定されるが、断定するまでには至らなかった。

遺物は、図示した以外に少量の弥生土器壺等の小片と、サヌカイト剥片5点が出土したのみである。

56はSD2018、57・58はSD2019出土資料である。56は口縁部が短く外反する中型の壺。57は、体部より口頭部を叩き出す粗製の弥生土器壺である。おそらくは黒雲母花崗岩を起源とする黒雲母粒を多量に含む特徴的な胎土を有する。58は布留系の古式土師器壺。完形に復元可能な状態で出土したが、体部は小片化して接合できなかった。器表面の剥離が顕著。以上の出土資料は、弥生時代終末期～古墳時代前期前葉に位置付けられ、いずれもベースSR2001からの混入資料と考えられ、出土遺物より本溝の時期を特定することは困難である。平面図上の調査記録よりSD2027と同時に併存したと考えるなら、後述するように古墳時代後葉より古代前葉の間に開削・埋没したものと考える。

#### SD2025（第20図）

I区南半部第2構造面aで検出した南北溝で、北端は上述したSD2018に切られ、南端はI区とII区の調査区境で途切れる。約12mを検出した。南半部でクランク状に小さく屈曲するが、概ね流路方向N 40.46°Wに配され、検出面幅0.61～1.07m、残存深0.05m前後、断面形は浅い皿状を呈する。流路底面の標高は、南端部で11.67m、北端部で11.56mをそれぞれ測り、高低差より北へ流下する。埋土に関する情報は不明である。

遺物は出土しておらず、時期を特定することは困難だが、切り合い関係より上述したSD2018より先行する。

#### SD2026（第20図）

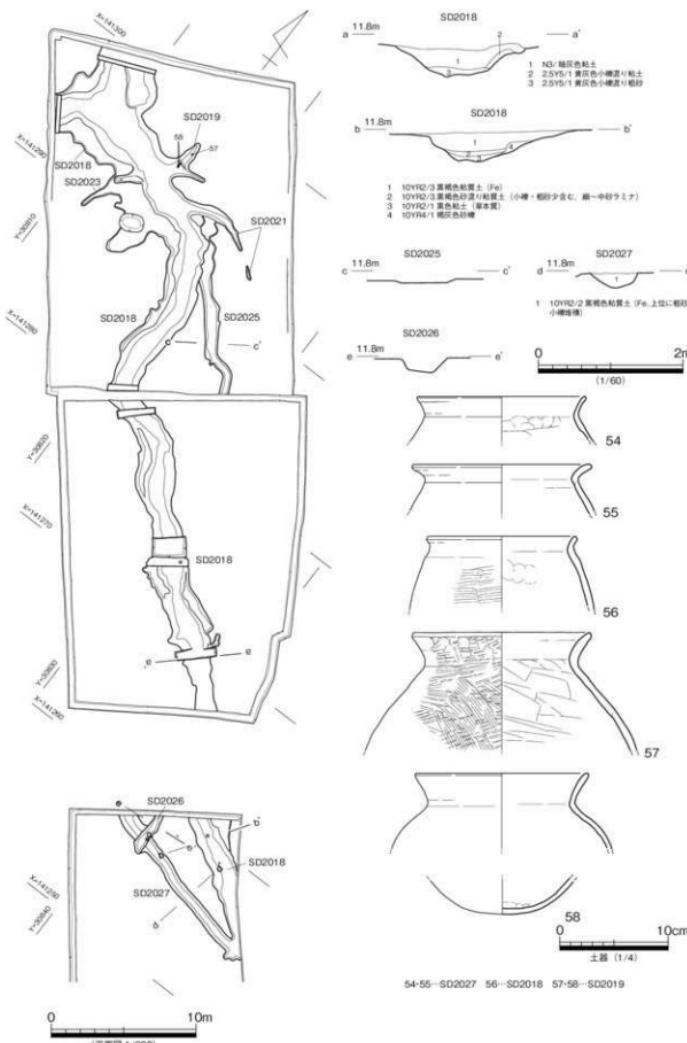
III区北端部第2構造面aで検出した南北溝で、北端は調査区外へ延長し、延長はII区では検出されておらず、約3.0mを確認したにとどまる。後述するように、SD2027より後出す。検出面幅0.6～0.7m、残存深約0.35m、断面形は概ね逆台形状を呈する。流路方向はN 31.15°Wと、ほぼ正方位に配され、形状より北へ流下した可能性が高い。埋土は黒褐色粘質土の単層で、層下位に中～粗砂が混じり、溝機能時の水成堆積層と考えられる。

遺物は、器種不詳の弥生土器小片が少量と、サヌカイト剥片1点が出土したのみである。既述したSD2018同様に、SR2001からの混入と考えられる遺物しか出土していないが、流路方向がほぼ正方位を志向することを重視するならば、本地域における条里型地割の施工に先行する、古代前葉に開削された可能性が想定される。

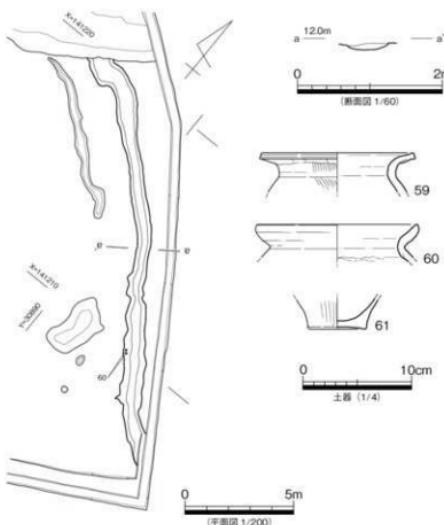
#### SD2027（第20図）

上述したようにSD2018より西へ派生する東西直線溝で、西端は調査区外へ延長し、約11.6mを検出した。切り合い関係より、SD2026より先行する。検出面幅0.8～1.2m、残存深0.2～0.4mで、断面形は碗底状を呈する。流路方向N 76.05°Wに配され、流路底面の標高は、西端部で11.2m前後、SD2018との合流部付近で11.5m前後をそれぞれ測り、高低差より西へ流下する。埋土は調査区北壁での観察で、褐色系粘質土を主体に2層に分層され、上位層に辛うじて流水堆積を認める。SD2018との層位的な対応は不明である。

遺物は、上層より弥生土器壺等の小片が少量と、サヌカイト剥片1点が出土したのみである。54・



第20図 SD2018・2019・2025～2027 平・断面・出土遺物実測図



第21図 SD2031 平・断面・出土遺物実測図

11.70 m 前後を測り、高低差より南東へ流下していた可能性が考えられる。地形面の傾斜方向とは異なり、溝南東端の何らかの施設への導水を意図した溝とも考えられるが、延長が調査区外となること等によりその性格については明らかにできない。埋土は単層のようだが記録がなく、また調査区東壁の土層図にも該当する堆積層はみられない。

遺物は、図示した以外には、弥生土器小片が少量と、サスカイト剥片数点が出土したのみである。**59**は弥生土器土佐型甕の口縁部片。胎土や細部調整より、搬入土器ではなく在地産の模倣形態とみられる。県内では、善通寺市旧練兵場遺跡(香川県教育委員会ほか2011)やさぬき市尾崎西遺跡(香川県教育委員会2008)等に出土例がある。**60**は弥生土器甕。内湾気味に聞く口縁部より、古墳時代に位置付けられる可能性がある。**61**は同底部片である。これら出土遺物は、SR2001からの混入と考えられ、流路方向が条里型地割の方向と合致しないことや検出面等を根拠に、溝の開削・埋没は古墳時代後葉から古代前葉の間と考える。

#### 水田遺構

##### SZ2001 (第22・23図)

I・II区中央部で南北に帯状に検出した。前節で記載したように、弥生時代～古墳時代の自然河川SR2001の流路上面の低地部を利用して造成されたとみられる。南北に長く設置された畦畔と、それに直交して設けられた東西方向の畦畔により、平面不整形の大小7区画に細分され、各小区画を区分す

55は、いずれも上層より出土したとされる弥生土器甕の口縁部小片。出土遺物はSD2018同様、SR2001からの混入資料と考えられ、本溝の時期を直接示すものではない。SR2001埋没後に開削され、SD2026より先行することから、古墳時代後葉から古代前葉の間に開削・埋没の可能性を考える。

##### SD2031 (第21図)

IV区南東部第2造構面aで検出した南北溝である。調査区南東隅より緩やかに屈曲しながら北西方向へ約18.5 m延長し、北端は後述する中世溝SD2015に切られる。同溝以北で延長は確認されていない。検出面幅0.62～1.03 m、残存深0.12 m前後で、断面形は皿状を呈する。流路底面の標高は、北西部で11.84 m前後、南東部で

る畦畔のいくつかには、中央部に水口が切られている。ただし、これら東西方向の畦畔群については、平面的な記録からは、詳細は明らかにし難い。各区画の耕土層下面の標高は、第22図に示したように区画により幅がみられるが、概ね南から北へ緩やかに下り、用水の給水を配慮した造成がなされていると考えられる。

耕作土や畦畔の土層断面の観察記録は、前節で既述したI区北壁（第6図）とII区北壁（第7図）においてのみ残されている。前節と重複する部分もあるが、以下詳述する。I区北壁においても、耕土層と南北畦畔が記録され、I区以北に水田が展開する可能性が考えられる。この場合、1次調査区で確認された水田面との関係が課題となるが、1次調査区においても、下層の自然河川の埋没低地を利用した造成がなされていたと考えられ、一連の水田面である可能性は指摘できる。

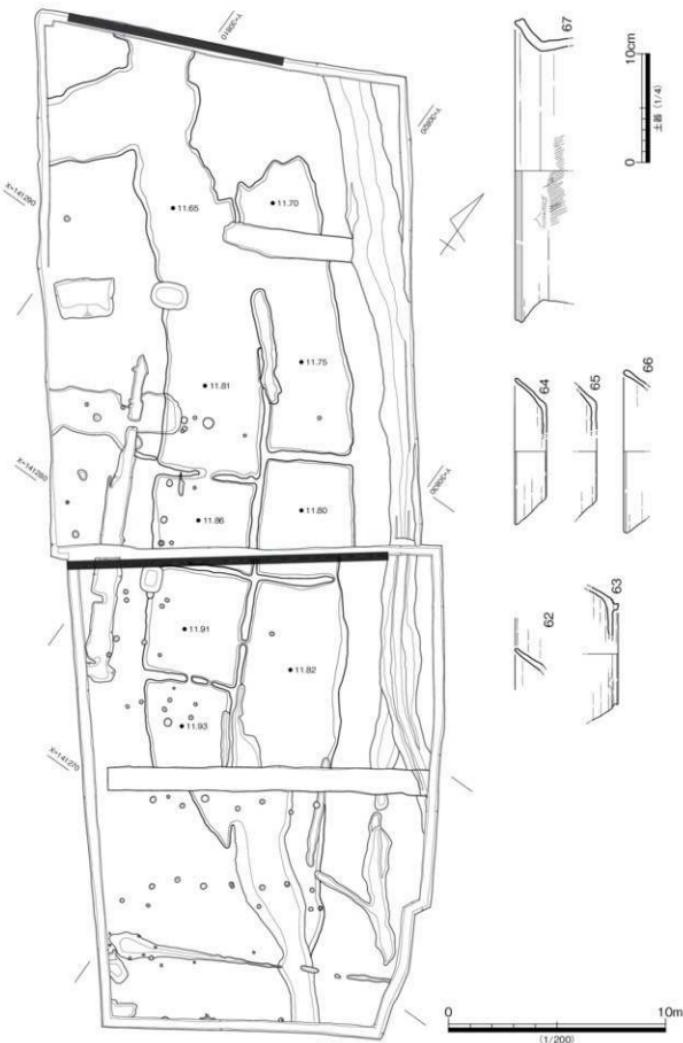
II区においても、耕作土と畦畔が記録されているが、耕作土上面には黄灰色シルト質土（36層）が堆積するが、畦畔は同層をも東西に2分する。つまり、36層は水田廃絶後に水田畦畔を壊さずに堆積したと理解され、達感と強く感じる。畦畔部分の土層写真では、耕土層（39層）は畦畔東側にも分層されるが、その部分の土質は水田面ベース層の44層と酷似し、西側に分層された39層とはやや異なるように見える。事実、次章に後掲する同層のプラントオパール分析では、畦畔東側の耕土層からの同化石の出現頻度は非常に低い。また、畦畔は上下2層に細分されるようにも見え、36層との関係も、記録の通りではない可能性も考えられる。何よりも土層断面に示された耕土層の範囲と、平面的に調査された区画の広がりが、全く整合しない点も大きな疑問である。プラントオパール分析の結果からは、II区北壁39層が水田耕土層である可能性は高いと考えられるが、その水田の平面区画を含めた詳しが、調査記録のとおりであるのかについては、実証的に検証することは不可能であった。

水田耕土層出土とされる遺物は、I区より弥生土器や土師器甕・須恵器皿・杯、土師質土器等の小片が30点程度、II区より水田埋土精査時出土とされる土器や須恵器片等が少量あるのみである。このうち、中世に位置付けられるI区出土の土師質土器杯は、1点のみの出土であるため、混入の可能性が高い。それ以外は、9世紀代を下限とする。

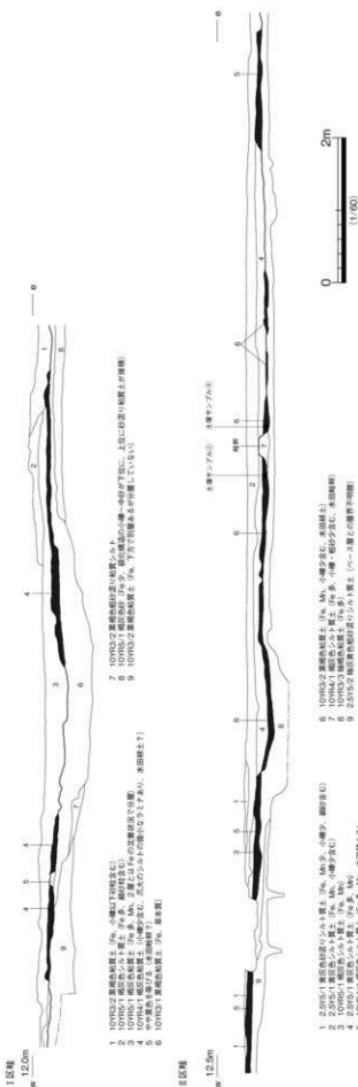
さて、水田耕土層出土とされる遺物で図化したのは、62の須恵器皿と、63の同杯であり、概ね9世紀中葉を下限とする。いずれも出土位置は不明である。64～67はII区灰白色層掘り下げ時に出土したとされる資料であるが、その灰白色層が前節で既述した層序のどの層に対応するのかは不明である。出土した日付は、水田耕土層調査の直前であり、土色から判断してII区北壁36層（第7図）出土資料である可能性が最も高い。67の土師器甕は9世紀代に位置付けられ、64～66の土師質土器杯・碗は、12～13世紀前半を中心とする時期と考えられる。以上の出土遺物より判断して、水田は9世紀中葉～12世紀の間に経営されたと考えられ、9世紀後半～11世紀代の遺物がほぼ皆無であることから判断して、水田の経営時期は9世紀中葉に近接した時間とするのが妥当と考えられる。なお、36層上面より後述する掘立柱建物SB2001が配されていることからすれば、36層は屋敷地造成に伴う造成土であった可能性も考えられよう。

### 3 中世

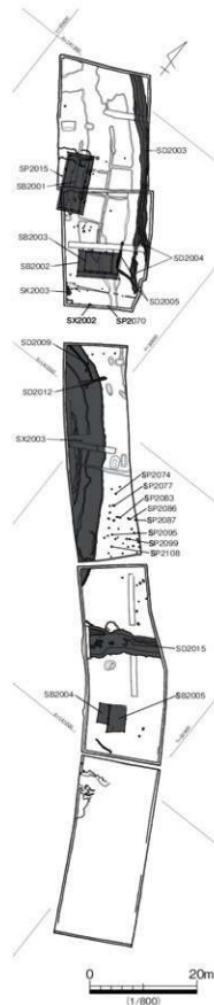
各区第1遺構面で検出された遺構のうち、当該時期の遺物が出土した遺構を中心に、主軸方向や埋土等を基準に、掘立柱建物5棟、土坑1基等を当該期の遺構として報告する。



第22図 SZ2001 平面・出土遺物実測図(平面図内の数値は標高、単位m)



第23図 SZ2001 断面図



第24図 中世遺構配置

や古く位置付けられるものが認められるものの、概ね13世紀中葉を下限とする時期に収まり、建物の時期を示しているものと考える。

#### SB2002 (第27・28図)

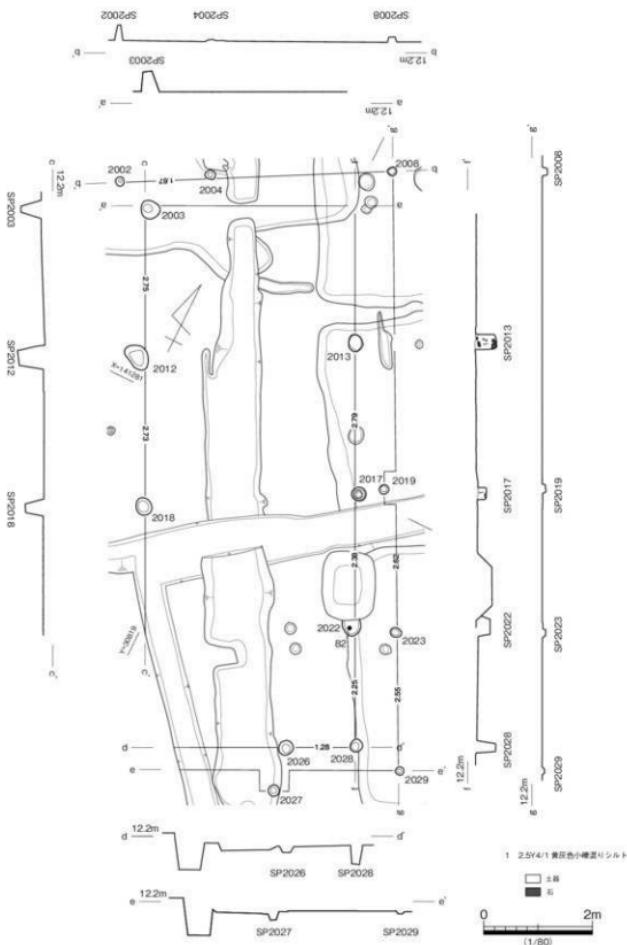
II区1面中央南半部で検出した掘立柱建物で、切り合ひ関係よりSD2005より後出す。後述するSB2003と重複するが、柱穴に切り合ひ関係はなく、先後関係は不明である。しかし、ほぼ同位置に、建物主軸を概ね合致して配されていることから、建て替え等の関係が想定される。桁行3間(7.55m)、梁間1間(3.97m)、主軸方向N 56.46°Eに配された、南面に庇を有する東西棟の倒柱建物として復元する。庇を除く主屋部分の床面積は約300m<sup>2</sup>である。柱穴は、径または長軸0.2~0.3mの平面略円ないしは梢円形を呈し、残存深は0.09~0.40mで、埋土は淡灰色シルトが堆積していた。SP2050で根石89を、SP2041で径約0.11mの柱痕を確認したが、いずれも柱材は残存していないかった。

遺物は、庇のSP2056とSP2049を除く各柱穴より出土している。うち7点の遺物を図示した。**86**がSP2040、**83・89**はSP2050、**85・87・88**はSP2041、**84**はSP2055出土のそれぞれ遺物である。

**83**は土師質土器皿。**84**は同碗である。体部下半から底部にかけて、底部切り離し時の粘土が厚く付着する。**85**は、全形の半分ほどが残る和泉型瓦器碗で、柱穴内に意図的に据え置いた可能性がある。尾上編年II-2期。**86**は瓦質土器捏鉢。体部内面は使用による磨滅を顕著に認める。**87**は土師質土器鍋の小片。**88**は土師器甌の焚口部の小片である。鋸部周辺と内面下半部を中心に煤が付着する。柱痕部より出土した可能性があり、柱材抜き取り後に混入したものと考えられる。**89**は、やや幅の広い略方柱状の細粒砂岩の亜円礫を利用した砥石である。表裏広端面2面と狭端面1面の3面に擦痕を認め、広端面を顕著に使用する。また、被燃により一部黒色化するとともに狭端面の一部が剥離しており、砥石としての使用後に、別の用途に転用した可能性がある。また、図下半を欠損するが、被燃痕との関係より、破損は被燃後になされたと考えられ、柱穴根石に転用するに際して、割り取った可能性が考えられる。以上の出土遺物には、若干の時期幅が認められるものの、概ね13世紀前半代を下限とし、上述のSB2001と共に存する可能性を想定する。

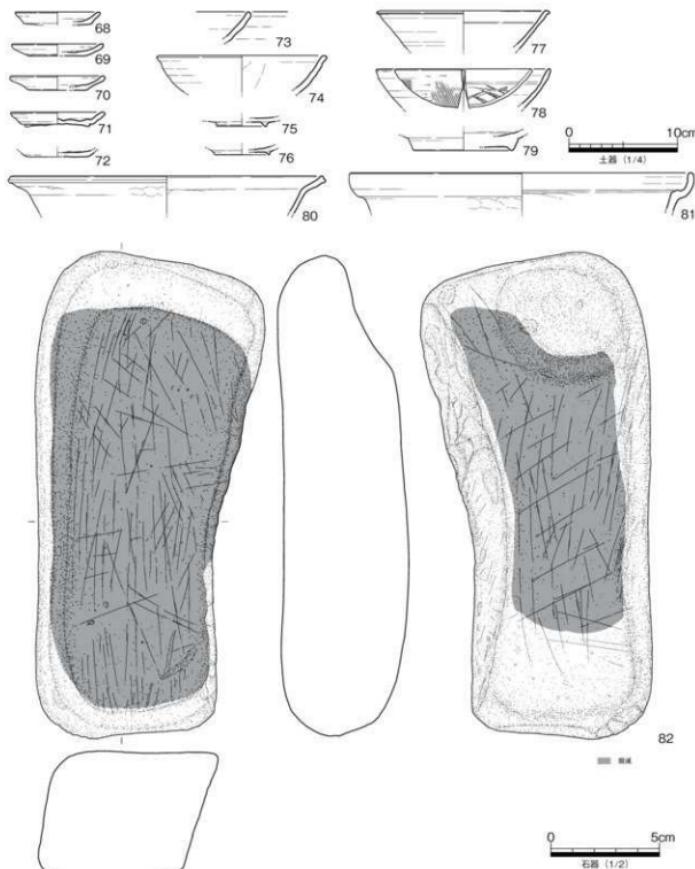
#### SB2003 (第29図)

II区1面中央南半部で検出した掘立柱建物で、既述したようにSB2002と重複する。桁行2間(5.03m)、梁間1間(3.41m)、床



第25図 SB2001 平・断面図

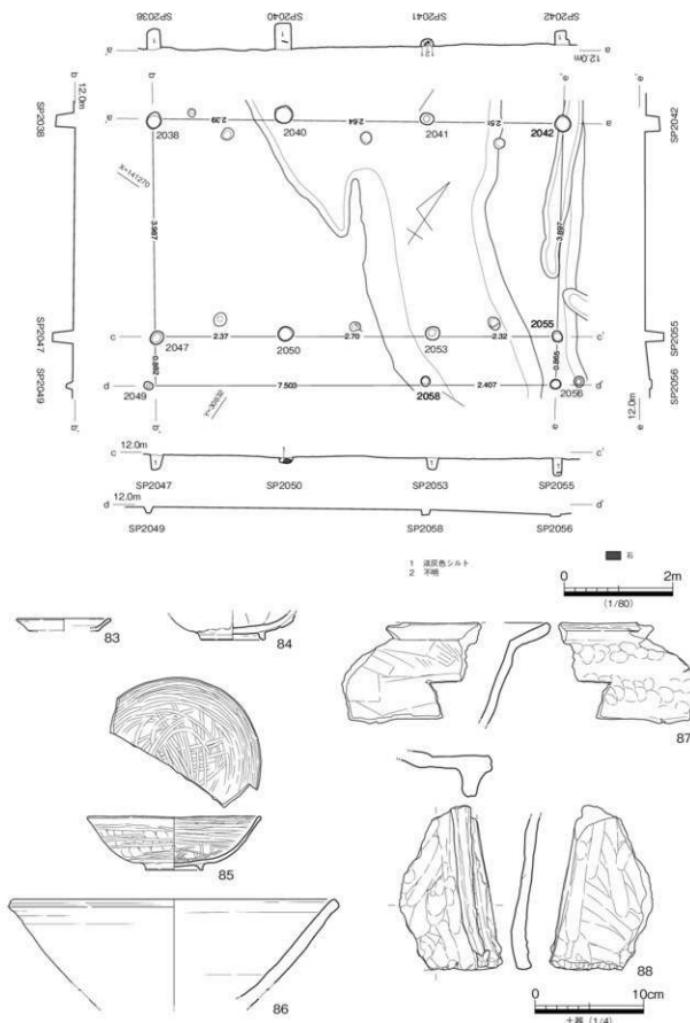
面積 17.15m<sup>2</sup>、主軸方向 N 57.7° E に配された、東西棟の側柱建物として復元する。柱穴は、径または長軸 0.18 ~ 0.22 m の平面円もしくは楕円形を呈し、残存深は 0.08 ~ 0.25 m で、埋土は黄灰色シルトが堆積していた。SP2054 と SP2051 で径 0.12 m 前後の柱痕を確認したが、いずれも柱材は残存していない。



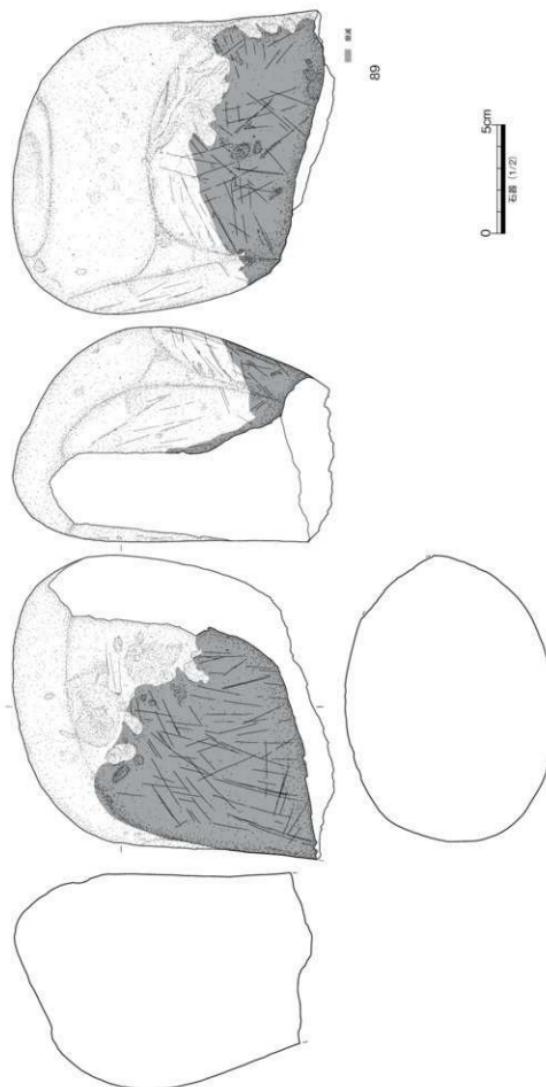
第26図 SB2001出土遺物実測図

た。

遺物は、SP2051を除く各柱穴より、土師質土器や瓦質土器等の小片が少量出土した。出土遺物は小片が多く、図示したのは90の土師質土器皿1点のみである。出土遺物より細かな時期を特定することは困難だが、13世紀前葉頃に位置付けられると考え、SB2002より、先行する可能性を想定する。



第27図 SB2002 平・断面・出土遺物実測図 1



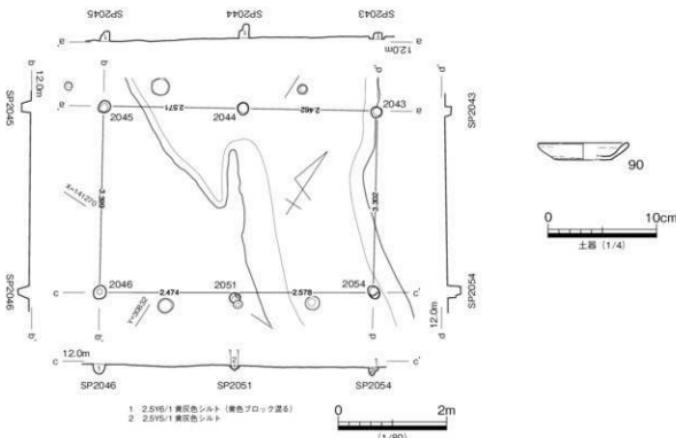
SB2004 (第  
30図)

IV区南西部で検出した掘立柱建物である。後述するSB2005と重複するが、柱穴に切り合い関係はなく、先後関係は不明である。

桁行1間(3.52m)、梁間1間(2.04m)、床面

積7.18m<sup>3</sup>、主軸方向N 29.23°Wに配された、南北棟の建物を復元する。桁行の柱間間隔は広く、本来は2間であったと考えられる。柱穴は、径もしくは長軸0.15~0.23mの平面円もしくは梢円形を呈し、残存深は0.03~0.14mで、埋土は灰色砂質シルトが堆積していた。

遺物は、SP2125を除く各柱穴より器種不詳の須恵器等の小片が少量出土したのみであ



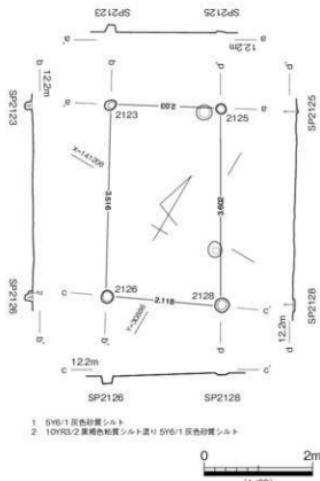
第29図 SB2003 平・断面・出土遺物実測図

り、図化可能な資料は出土していない。後述するように、SB2005と埋土は酷似し、位置関係からも、当該期の遺構の可能性を考える。

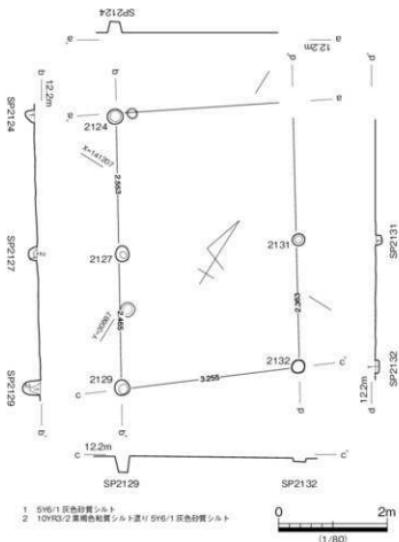
#### SB2005（第31図）

IV区南西部で検出した掘立柱建物で、北東隅柱を欠く。また、柱穴配置にやや歪を認め、平面形は整った矩形とはならない。桁行2間（5.02m）、梁間1間（3.26m）、床面積16.37m<sup>2</sup>、主軸方向N 33.61°Wに配された、南北棟の側柱建物として復元する。柱穴は、径もしくは長軸0.21～0.26mの平面円ないし梢円形を呈し、残存深は0.06～0.32mで、埋土はSB2004同様に灰色砂質シルトが堆積していた。位置関係からもSB2004と大きな時期差を見積もることはできないと考える。

遺物は、SP2127とSP2124より土師質器杯等の小片が数点出土したのみで、図化可能な資料は出土していない。出土遺物より当該期の遺構の可能性を考えるが、詳細な時期を特定することは困難である。



第30図 SB2004 平・断面図



第31図 SB2005平・断面図

いずれも和泉型瓦器碗である。100はSP2095、101はSP2099、102はSP2087柱痕部、103はSP2086、104はSP2108、105はSP2074出土のそれぞれ資料で、概ね尾上編年Ⅲ期に位置付けられよう。

以上のように、Ⅲ区柱穴群出土の資料は13世紀前半を下限として位置付けられるものであり、建物遺構こそ復元できなかったが、I・II区の建物群とほぼ同時期に建物が配されていた可能性が高いことが判明した。

## 土坑

### SK2003 (第33図)

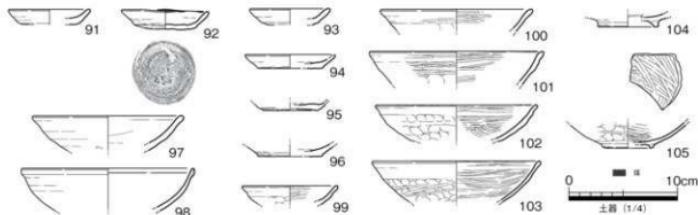
Ⅱ区南西隅部で検出した土坑である。西半部は調査区外へ延長し全形は不明。平面形は、長軸1.30m以上、短軸0.81mの不整な隔丸長方形を呈する。残存深0.25m、断面形は碗底状を呈する。埋土は、褐灰色シルトの単層で、ブロック土を含むことから人為的な埋め戻しの可能性も考えられる。

遺物は、数点の土師質土器小片のほか、サヌカイト測片2点が出土した。出土遺物より、当該期の遺構の可能性が考えられるが、細かな時期を特定するまでには至らない。106は、須恵器有蓋高杯の蓋小片とした。天井部と口縁部の境に、浅い沈線1条を認める。6世紀代に位置付けられ、混入資料と考える。

## 柱穴 (第32図)

第32図に図示した遺物は、建物遺構を構成しない柱穴より出土した資料で、特にⅢ区で検出された柱穴群を中心に、遺構の時期を特定し、遺跡を評価する上で必要と考えるものを掲載した。

91・92はSP2070出土の土師質土器皿。92は、ほぼ完形に復元され、意図的に柱穴内へ据え置かれた可能性が考えられる。口縁部には複数箇所に煤が付着し、灯明皿として使用されたとみられる。93はSP2099出土の、94はSP2095出土の、95はSP2087柱痕部出土の、96はSP2077出土のそれぞれ土師質土器皿である。95の胎土中には、やや多量の火山ガラスを認める。97はSP2070出土の土師質土器碗の小片。本資料も、胎土中にやや多量の火山ガラスを認める。98はSP2070出土の白磁碗II-1類。釉は薄く、淡緑白色を呈する。99はSP2083出土の和泉型瓦器皿。100～105はい



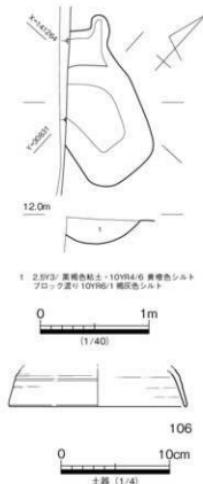
第32図 柱穴出土遺物実測図

## 溝

SD2003 (第34図)

I・II区東端部を緩やかに蛇行して配された南北溝である。南北両端は調査区外へ延長し、約325mを検出した。切り合ひ関係よりSD2004より後出する。流路方向や埋土等より、1次調査区SD21の南延長溝である可能性が高い。検出面幅1.20~2.51m、残存深0.87mで、断面形は概ね碗底状ないし逆台形状を呈する。流路底面の標高は、北端部で10.8m前後、南端部で11.0m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下する。埋土は2~3層に分層され、暗色系粘土や黄色系細~粗砂が堆積する。I区では水成堆積層は認められず、人為的な埋戻し土の可能性が指摘されるが、II区では層下半はラミナ堆積を呈して溝機能時の堆積層と考えられ、場所により堆積層が大きく異なる。

遺物は、図示した以外に少量の器種不詳の弥生土器小片と、サヌカイト剥片2点が出土したのみである。107・108は、弥生土器甕等の小片で、111と共に既述したSR2001からの混入資料であろう。111は、サヌカイト製の打製石鏃である。109は土師質土器皿。同一個体の破片がSP2015より出土した。110は土師質土器杯。底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整を施す。



第33図 SK2003 平・

断面・出土遺物実測図

SD21からは、ON46型式併行期前後の須恵器高杯片が出土した可能性があるとされるものの、詳細は明らかではない。今次調査で出土した遺物より、13世紀後半を上限とする時期に埋没した可能性が想定され、本調査区建物群の東辺を画した可能性も想定されるが、全体像が不明なため断定するまでには至らない。

SD2004・2005 (第34図)

SD2004は、II区南東部を南北に直線状に配された溝で、北端はSD2003に切られ、南端は調査区内で途切れ、延長約122mを検出した。中ほどより、SD2005が北西へ派生する。概報では、既述した水田SZ2001への導水路の可能性を想定するが、明確な根拠に乏しい。既述したように、水田面がより東西方向に広がる可能性があること、水田耕土層上面よりSD2005が掘り込まれていること、SD2004の

北延長部がSD2003以北で検出されておらず、流路方向よりSD2003の前身溝となる可能性があること等より、SZ2001より後出す溝の可能性を想定する。SD2004は、検出面幅0.55～1.10m、残存深0.06～0.10m、断面形は浅い皿状を呈する。流路底面の標高は、北端部で11.75m、南端部で11.84mをそれぞれ測り、高低差より北へ流下する。埋土は、灰白色シルトの単層であった。

遺物は、弥生土器窯の小片やサヌカイト剥片が少量出土したのみであり、図化可能な資料は出土していない。いずれもSR2001からの混入資料と考えられ、遺物から時期を特定することは困難であり、SD2003との関係を踏まえるなら、当該時期の造構の可能性を想定する。

#### SD2009（第40図）

Ⅲ区北西隅部、後述するSX2003底面で検出した、緩く弧を描いて東西に配された小溝である。流路方向はSX2003とはほぼ合致することから、SX2003と関係を有した造構の可能性が考えられる。検出面幅0.25m前後、残存深0.05m前後で、断面形は皿状を呈するとみられる。埋土に関する情報は不明である。情報が乏しく断定は困難だが、人為的に開削された溝ではない可能性も想定される。

遺物は、土師質土器杯や黒色土器碗等の小片が少量出土したのみである。204は黒色土器碗の小片。本溝の時期を直接示すか断定はできないが、11世紀代を上限とすることは考えられる。

#### SD2012（第40図）

Ⅲ区北半部で検出した南北直線溝で、切り合い関係より後述するSX2003より先行する。北端は調査区内で途切れ、南端はSX2003により削除され、延長約5.1mを検出した。流路方向N 38.6°Eに配され、流路底面の標高は、北端部で11.7m前後、南端部で11.35m前後をそれぞれ測り、高低差より南へ流下してSX2003へ合流するとみられることから、低地部であるSX2003への排水溝の可能性も考えられる。検出面幅0.5～0.75m、残存深0.05～0.10mをそれぞれ測り、断面形は皿状を呈するとみられる。埋土に関する情報は不明である。

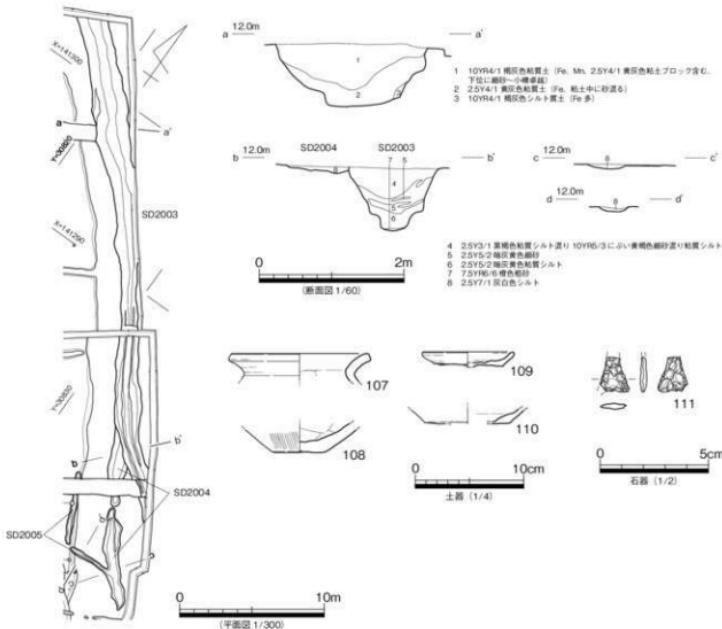
遺物は、土師質土器皿・杯・鍋、黒色土器碗等の小片が少量出土したのみで、図化可能な資料はない。

#### SD2015（第35～38図）

Ⅳ区中央部を東西に横断する大型直線溝で、延長13.6mを検出した。検出面幅3.4～4.5m、残存深0.7～0.9m前後、断面形は概ね逆台形状を呈する。流路方向N 56.52°Eに配され、周辺の条里型地割の方向と概ね合致し、金田章裕氏の条里地割の復原案（金田1988）では、里界線に相当する。流路底面の標高は、西端部で11.2m前後、東端部で11.5m前後をそれぞれ測り、高低差より西へ流下する。埋土は5～12層に細分され、灰色系細～粗砂により流水下堆積が顕著である。一部に改修の可能性を示唆するような分層を認めるが、断定するには至らない。

遺物は、コンテナ9箱とまとめて出土した。しかし、出土遺物の半数以上を、重複するSR2001からの混入と考えられる弥生土器やサヌカイト製石器類が占める。また、出土資料の大半に層位の記載がなく、一部に下層、最下層等の記載を認めるが、土層図に該当する記載がなく不明である。図示した資料では、137・144・146・185・186が最下層、112・115・119・127・133・152・156・158・162・171が下層出土のそれぞれ資料とされる。

112は古式土師器高杯の杯部小片。SR2001からの混入資料であろう。113～129は土師質土器皿。

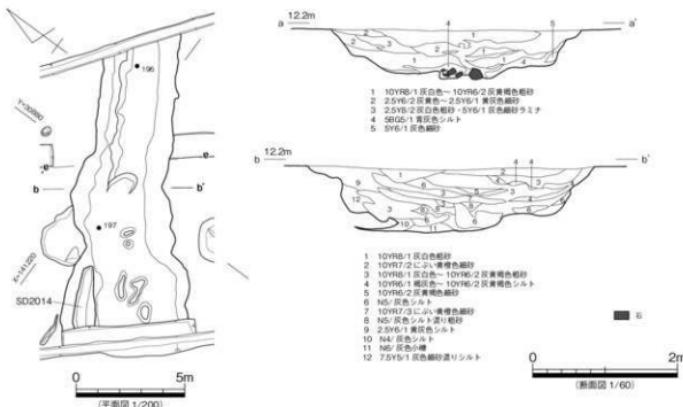


第34図 SD2003～2005平・断面・出土遺物実測図

129 の内面には一部に煤が付着し、灯明皿として使用されたと考えられる。119 もその可能性があるが、磨滅等のため断定できない。130・131 は土師質土器小杯とした。132 は同杯である。133 は突出した平底を有し、土師質土器平高台碗として図示したが、底径が小さく別の器種となる可能性もある。134～148 は土師質土器碗である。佐藤編年 I 期後半～II 期前半に位置付けられる。149 は黒色土器碗である。

150・151 は十瓶山周辺窯産の須恵器碗。150 はやや瓦質焼成に近い。152～155 は和泉型瓦器碗で、尾上編年 III 期前半に位置付けられる。156 は、口縁端部の釉を搔き取った、いわゆる口禿げの白磁皿で、IX類に分類される。157 は、内面見込みの釉を現状に搔き取った白磁碗Ⅷ-2類。焼成はあまく、胎土は黄味を呈する。158 は白磁碗 II 類。159 は同安窯系青磁皿 I-1 類。160・163 は龍泉窯系青磁碗 II-b 類。161 は、龍泉窯系青磁碗 III 類の底部片で、内面に双魚の貼付文を有する。大宰府では、13世紀中頃～14世紀初頭前後の標識器とされる。162 は龍泉窯系青磁碗 I-4 類。164 は上田編年青磁碗 D 類。内面見込みに印花文を有し、高台内の釉を輪状に搔き取る。

165・166 は土師器羽釜。167～171 は土師質土器足釜。168・171 の口縁部は鰐部接合法、167・169・170 は一体接合法とみられる。167～169・171 の外面上にはそれぞれ使用時の煤が付着する。171



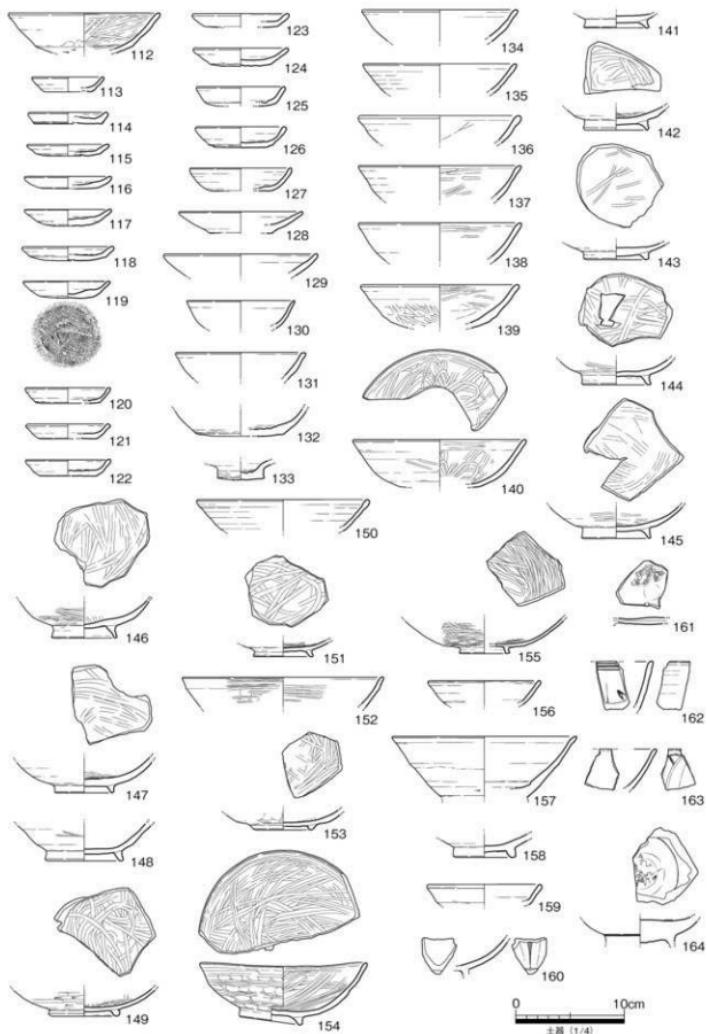
第35図 SD2015平・断面図

が最も古く楠井編年Ⅰ期に、次いで168が同第Ⅱ期2段階に、167・169・170は同第Ⅲ期3段階にそれぞれ位置付けられよう。172・173は土師質土器鍋。172の外面には煤が付着する。174～176は土師質土器擂鉢の口縁部小片。175は、内面剥離によりおろし目が確認できない。楠井編年第Ⅱ期第1～2段階に位置付けられる。177は、備前焼擂鉢の口縁部小片。乘岡編年中世5期に位置付けられる。178は十瓶山周辺窯産とみられる須恵器鉢。179・180は東播系須恵器鉢。179は森田編年Ⅶ期2段階に位置付けられる。180の内面は、使用による磨滅が顕著に認められる。181は瓦質土器鉢である。182は瓦質土器甕。口縁部は叩き出し、端部を矩形に収める。183は十瓶山周辺窯産とみられる須恵器壺の底部片。184は須恵器甕の底部片である。外底面にもカキ目を施す。

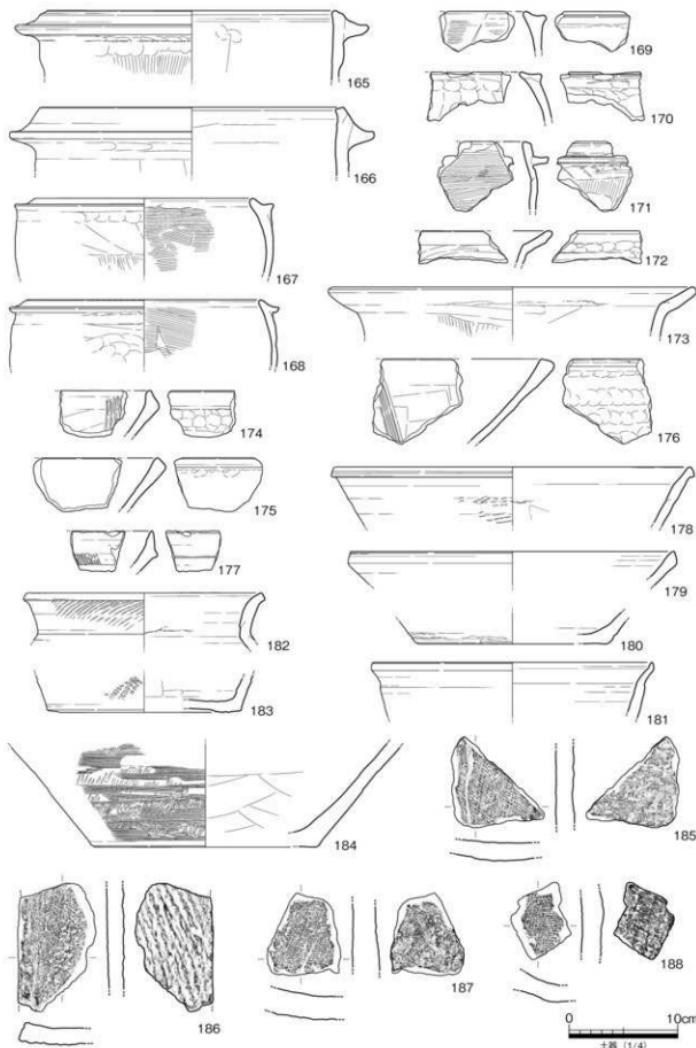
185・187・190は土師質焼成の、186・189は須恵質焼成のそれぞれ平瓦の小片である。186・187・189・190の凸面は網目タタキとみられ、古代～中世初頭に位置付けられる可能性がある。188は瓦質焼成で凸面にハナレ砂が付着し、中世に位置付けられる。

192は凹基式の、196は凸基式の、191・194・195は平基式のそれぞれ打製石縫である。193も打製石縫だが、基部を折損する。198は、直線状の刃部を有するスクレイパーとして図示した。図右面には広く自然面を残す。199は、弧状の刃部を有するスクレイパーであろう。背部に一部自然面を残す。197はチャート調片である。火打石として使用されたものの残片であろうか。四国南部の秩父帯もしくは四十万石からの搬入資料である。200は、粘板岩製とみられる方形石硯の小片である。海部周縁の硯盤部分の小片とみられ、各面は平滑に研磨されている。201は銅製腰帶具の丸柄で、表金である。垂孔は小孔で、裏面には2箇所の脚鉄を認める。202は、1068年初鋤の北宋錢「熙寧元寶」で、使用により全体にやや摩耗する。203はサワラ材を用いた用途不明の板材小片である。

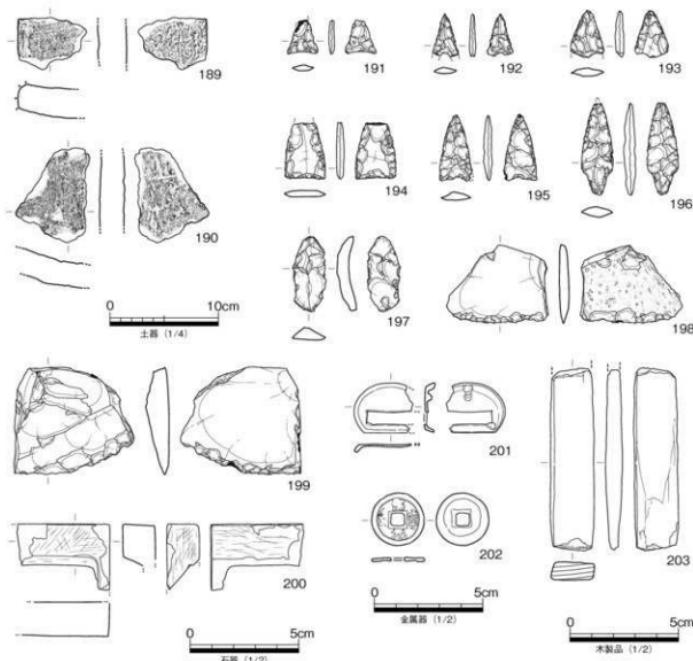
上述した出土遺物については、11世紀後葉～14世紀代の遺物が主体を占め、15世紀後半～16世紀代の遺物が少量ながら認められる。層位的な関係を含めた出土状況の詳細が不明な遺物が多く、出土遺物より溝の開削・廃絶等について断定することはやや困難である。しかし、遺物の時期別出土量から推



第36図 SD2015出土遺物実測図1



第37図 SD2015出土遺物実測図2



第38図 SD2015出土遺物実測図3

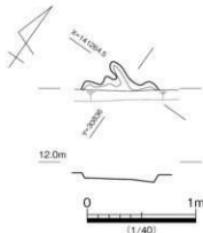
して、概ね12～13世紀代には開削され、14世紀代までは継続して使用されていた可能性は高いと考えられる。

#### 性格不明遺構

##### SX2002（第39図）

II区1面中央南端部で検出した落ち込みで、南半部は調査区外へ延長するため全形は不明である。平面形は、東西0.69m以上、南北0.27m以上の不定形を呈するとみられる。残存深0.07mと浅く、断面形は皿状を呈るとみられる。埋土は、調査区南壁の土層図にも該当する堆積層が記録されておらず、詳細は不明である。平面形状より、風倒木痕等の可能性が考えられる。

遺物は、器種不詳の土師質土器小片1点が出土したのみである。出土遺物より当該期以降の遺構の可能性を想定する。



## SX2003 (第40~44図)

IV区北西隅よりIII区西半部にかけて、緩やかに弧を描いて検出された低地帯である。調査時には溝として捉えられていたが、後述するように規模や断面形状、埋土に明確な流水堆積が認められないこと、流路方向が条里型地割と合致しないこと、1次調査区で本遺構に連続するとみられる溝が確認されていないことから、低地帯として報告する。前章第1節で既述したように、本調査区西側には本遺構の形状と概ね合致するように、完新世段丘崖が東に張り出しており（第3図）、段丘崖東辺の可能性も考えられる。

**第39図 SX2002 平・断面図** 南北延長約43mを検出した。検出面幅6.9m以上、残存深1.12m前後を測り、断面形は、上半部は緩やかに下り、下半部は直に近く掘り込まれているようである。埋土は5層以上に分層され、灰黄褐色ないし褐灰色の粘質土が堆積する。断面形状より、層下半部は別の遺構となる可能性も考えられるが、遺構底面までの断面記録が作成されておらず、また平面図からも断定するまでは至らない。

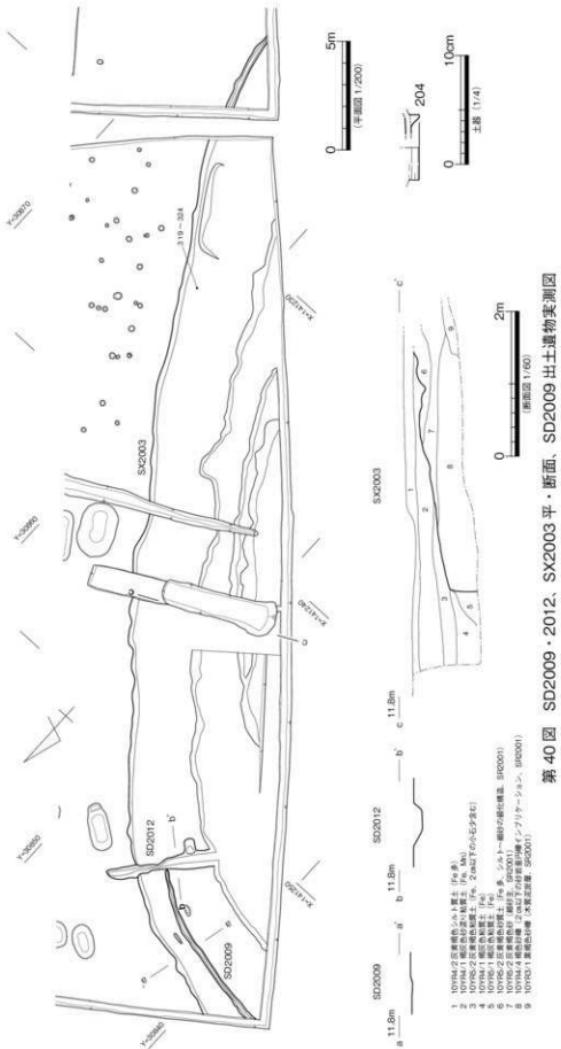
遺物は、コンテナ6箱と本調査区では多量に出土したが、大半は出土層位不明遺物であり、下層から出土した遺物はコンテナ半箱程度、最下層出土の遺物は器種不詳の土器小片1点に過ぎない。図示した以外に、弥生土器壺・甕、6世紀代の須恵器杯・9世紀代の須恵器皿・杯、土師質土器平高台碗、亀山系の瓦質土器、サヌカイト刷片、幼児頭大の砂岩焼窰、安山岩板石等が出土している。8~9世紀代以前の出土遺物は、量的に限られることから、混入資料であろう。図示したなかでは、313が最下層出土の、228・244・246・247・251・256・264・268・302・307・310が下層出土の、226・227が上層出土のそれぞれ遺物である。

205~214は土師質土器皿。212は、口縁端部の一部に煤が付着し、灯明皿として使用されたと考えられる。208の底部外面は回転糸切調整され、13世紀前葉以降に位置付けられる。215は台付皿の脚台部片である。216~227は土師質土器杯、外底面は、糸切の可能性のある216を除き、いずれも回転ヘラ切である。また、ヘラ切痕をナデ消すものがやや多い。土師質土器の213・223・232・242・244は、胎土中に中粒以上の石粒を含まず、やや多量の火山ガラスを認める点で、器種を超えた胎土の近似性を認める。228~252は土師質土器碗。内面見込みの調整には、平行ミガキと円弧状ミガキがあり、後者は前者に比べて、砂粒の含有の乏しい水簸された粘土を使用している傾向にある。また、240は体部と高台とで胎土が異なり、高台には多量の細~中粒の石粒を含む粘土が使用されており、作業工程が区分されていた可能性を示す。242は、土師質土器としたが炭素の吸着の劣る、黒色土器の可能性がある。253~257は黒色土器碗。258~260は十瓶山周辺窯産の須恵器碗である。

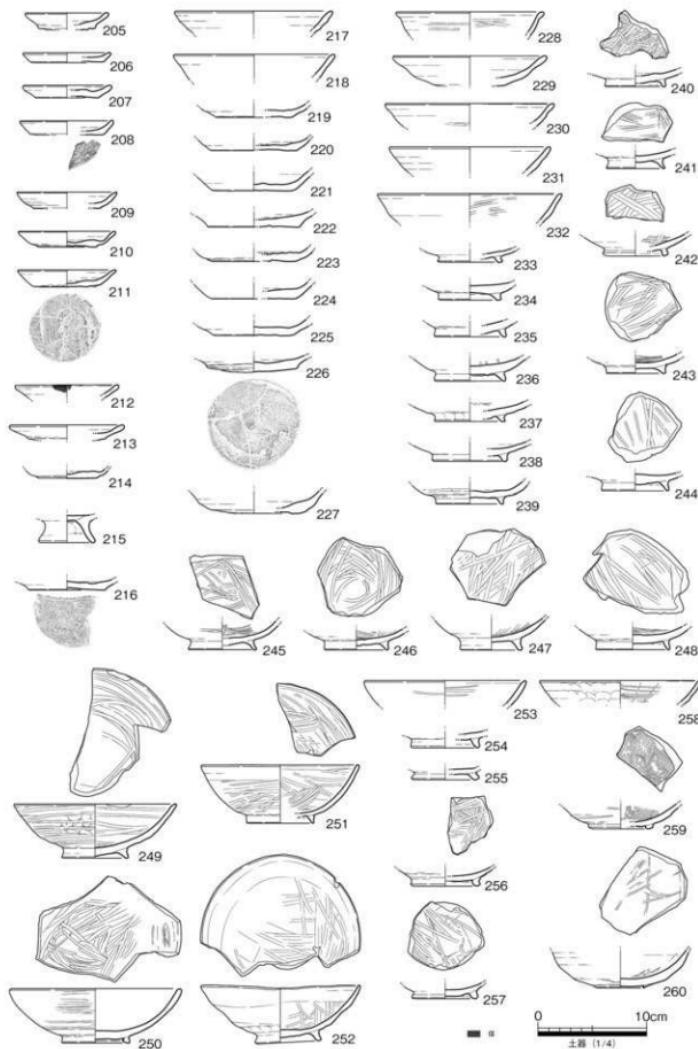
261~263は和泉型瓦器皿。264~277は同碗である。皿を含め、尾上編年II-1~II-3期に位置付けられる。278は白磁碗VI-1a類、279は同碗V類、280は同碗II-1類、281~283は同碗IV類である。284は龍泉窯系とみられる青磁皿。口縁部内面は縦に凹面の削りを入れ、花弁形とし、見込みに印花文を伴う。底部は基筒底とし、秒目が付着する。底部外面にも施釉され、この点で皿I類とは異なる。285は龍泉窯系青磁碗I類。内面を片彫の蓮華文で飾る。

286は十瓶山周辺窯産の須恵器壺底部片。287は東播系須恵器鉢の口縁部小片。森田編年Ⅳ期2段階前後に位置付けられる。288・289は在地産の瓦質土器鉢。口縁部形態から12世紀後半~13世紀前半

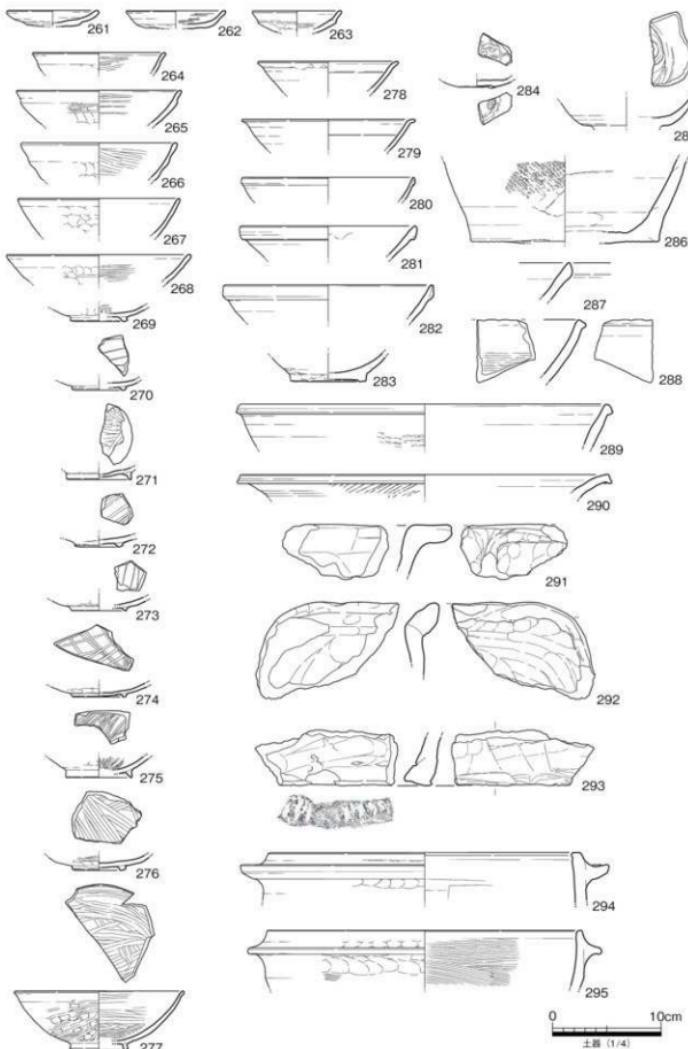
代に位置付けられる。**290**は口縁部叩き出しの須恵器甕。9世紀代に廻り混入資料である。**291・292**は、土師質焼成の移動式竈焚口部の小片である。鈎部の形状より、別個体と考えられる。内外面に煤が付着する。**293**は同底部小片。底部外面には薙とみられる細い棒状の圧痕を認める。**294**は、土師器羽釜の口縁部小片。11世紀代に位置付けられる。**295・296**は土師質土器足釜。鈎部の接合には、接合法**295**と屈折法**296**がみられる。**297～301**は土師質土器鍋。**301**を除いて、口縁端部はヨコナナにより丸く収め、明瞭な端面をなさないものが多い。また、外面には多く煤が付着する。**302**はミニチュアの足釜片である。別個体とみられる小片1点が他



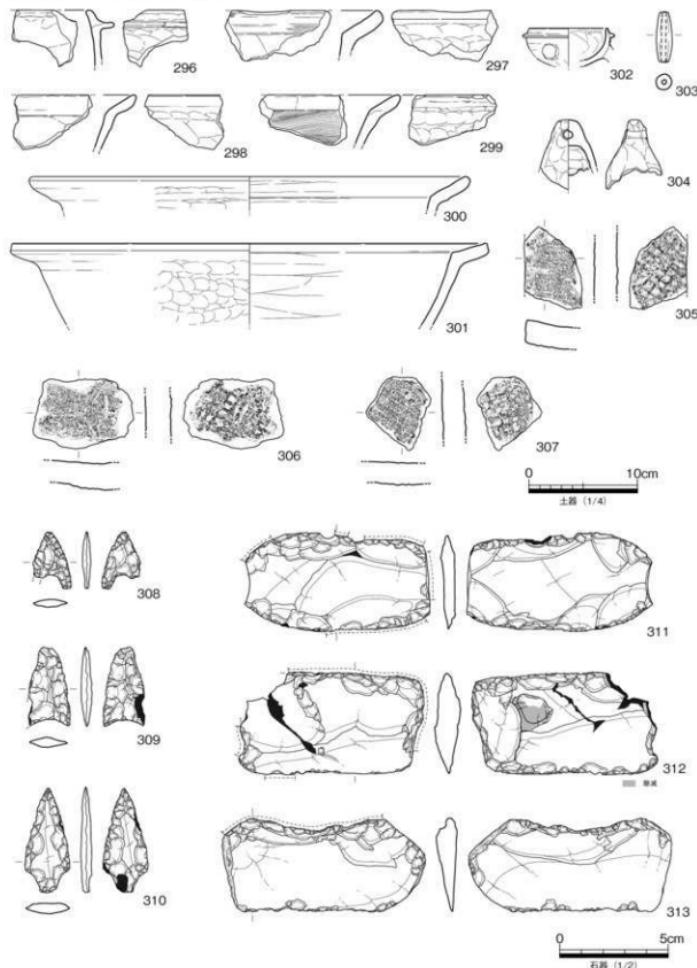
第40図 SD2009・2012、SX2003平・断面、SD2009出土遺物実測図



第41図 SX2003出土遺物実測図1

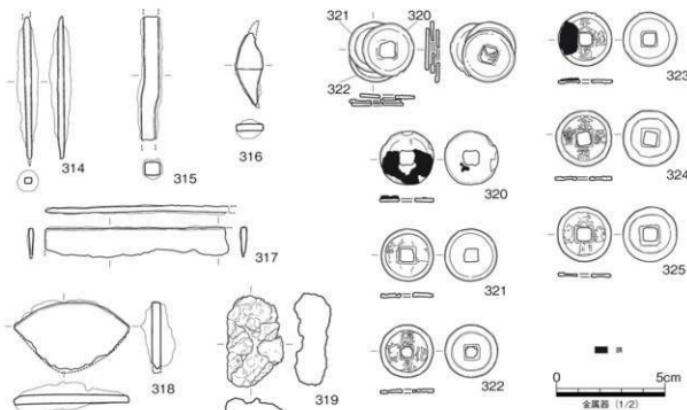


第42図 SX2003出土遺物実測図2



第43図 SX2003出土遺物実測図3

に出土しているが、図示していない。体部外面には薄く煤が付着し、使用的痕跡を認める。実用品ではなく、祭祀に用いられたとみられ、祭祀後破砕し投棄したものと考えられる。303は、本調査区唯一出



第44図 SX2003出土遺物実測図4

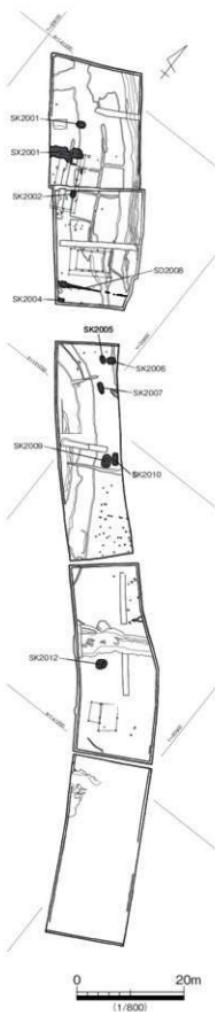
土した管状土錘である。本調査区で出土した土製漁労具は、本例と後述する飯蛸壺 304 の 2 点に限られる。304 は、土師質焼成の飯蛸壺である。頂部に径 0.75cm の円孔を穿つ。本資料も古代に遡る可能性が高い。

305 ~ 307 は土師質焼成の平瓦の小片である。いずれも凸面は格子目タタキが施され、古代に位置付けられる可能性がある。

308・309 は凹基式、310 は凸基式の打製石器である。309 は未成品の可能性がある。311・312 は、いずれも長さ 4.5cm 前後、幅 8.6cm 前後の薄い長方形を呈する板状の素材で、周縁に敲打による顯著な潰れ痕が、312 の図右面には磨滅痕が認められることから、打斧等を転用した楔形石器とした。313 は、上縁に顯著な潰れ痕を認め、下縁は微細な剥離痕が僅かに観察されることから、スクレイパーないしは使用痕のある剥片とした。

314 は細身の角釘で、上下端を欠く。315 はやや太い角釘とした。316 は、薄い板状を呈する用途不明の鉄製品で、上下端を欠く。317 は刀子とみられる鉄片。切先とみられる図左端は矩形を呈しており、茎とともに折損したか、別の用途に転用するため切断した可能性が考えられる。318 は心葉形を呈する用途不明の鉄製品で、図下端を欠く。火打金の可能性がある。319 は本調査で唯一出土した鉄滓で、おそらくは椀形鍛冶滓の小片とみられる。

320 ~ 325 は銅錢である。柱穴群の西側でまとまって出土した（第 40 図）。このうち 320 ~ 321 は、銅で固着した状態で、表裏の 320 と 322 は、それぞれ裏面を外側にして重ねられている。また、他の 3 枚にも別の個体から剥がされた痕跡が認められることから、本来は 6 枚の銅錢が重なって出土した可能性が想定される。こうした出土状況より、埋没途上の本遺構内へ据え置かれたものか、本来は本遺構埋没後に開削された別の遺構に伴う遺物であった可能性も考えられる。錢種が判別できたものはいずれも北宋銭で、320・321 は、肉眼では銅等のため錢種は判別できない。322 は 990 年初鋤の「淳化元寶」、



第45図 近世遺構配置

323は1,017年初鑄の「天祐通寶」、324は1,034年初鑄の「景祐元寶」、325は1,078年初鑄の「元豐通寶」で、いずれも裏面は摩耗により周縁等が不明瞭となっている。

上述したように、層位不明の遺物が多く、出土遺物より遺構の埋没過程を辿ることは困難だが、調査記録や出土遺物から判断する限り、13世紀代以前の遺物が主体を占めることから、概ね13世紀にかけて埋没が進行し、14世紀前半には埋没が完了し、氾濫原面の一部が平準化された可能性が考えられる。

### 近世

V区を除く各調査区第1遺構面で遺構を検出した。土坑が主体となり、多くの土坑で人為的な埋め戻しの痕跡が確認され、廃棄土坑と推定される。建物遺構等は検出されておらず、当該期には、水田等の耕作地として調査区周辺が利用されていたと考えられる。

### 土坑

#### SK2001（第46図）

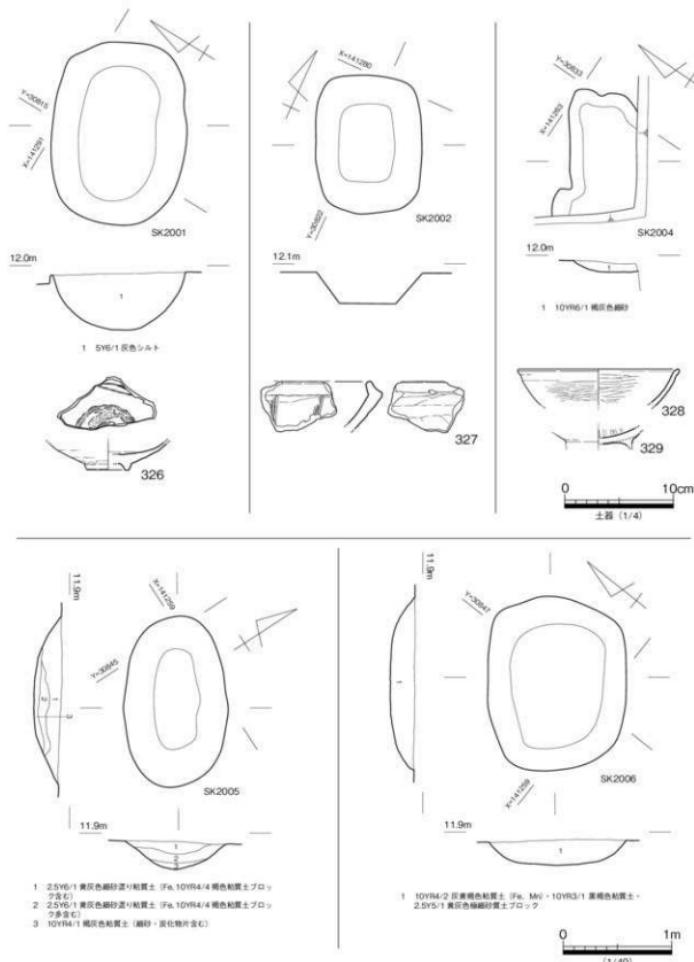
I区中央部で検出した土坑である。平面形は、長軸1.67m、短軸1.23mをそれぞれ測り、東西に長い整った隅丸長方形を呈する。主軸方向は、N 63.3°Eに配され、周辺の条里型地割と概ね合致する。残存深は0.54mで、断面形は碗底状を呈する。埋土は灰色シルトの單層であった。

遺物は、図示した以外に弥生土器や須恵器、土師質土器等の小片数点と、サスカイト剥片1点が出土した。326は肥前系染付皿。見込みを蛇の目剥ぎした後、砂目を置く。高台部無釉。口縁部内面に線状の簡単な文様を描く。17世紀後半から18世紀初頭を中心とする。

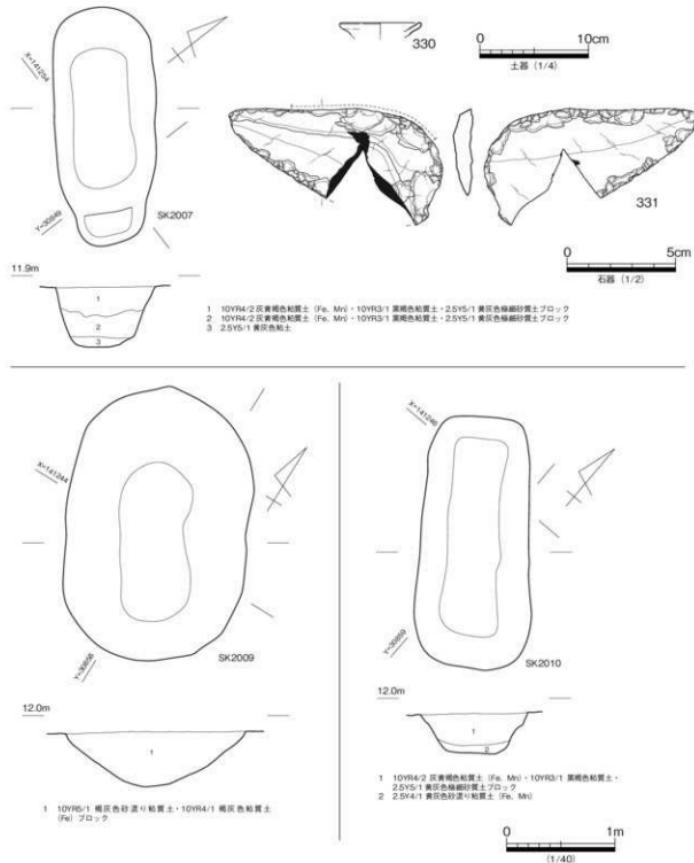
#### SK2002（第46図）

II区北西端部で検出した土坑である。平面形は、長軸1.25m、短軸0.96m、主軸方向N 25.39°Eに配された、南北に長い整った隅丸長方形を呈する。残存深0.33mで、断面形は逆台形状を呈するとみられる。埋土は記録されていない。

遺物は、図示した以外に器種不詳の須恵器や土師質土器の小片が少量出土したのみである。327は土師質土器擂鉢の小片。16世紀後半～17世紀前葉に位置付けられるが、本遺構の時期を直接指示するものは不詳である。



第46図 SK2001・2002・2004～2006 平・断面・出土遺物実測図



第47図 SK2007・2009・2010 平・断面・出土遺物実測図

#### SK2004（第46図）

II区南西隅部で検出した土坑である。掘り方の北辺と東辺の一部を検出したのみで、全形は不明。平面形は、長軸1.10m、短軸0.72m以上、現状で東西に長い不整な隅丸長方形を呈する。残存深0.1mで、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は、調査区壁面の土層図では2層に细分され、黄灰色ないし褐灰色の細砂質土が堆積する。

遺物は、図示した以外に須恵器や土師質土器の小片が数点出土したのみである。328・329は土師質土器碗小片。器壁厚が異なり、同一個体ではない。329の胎土中には、多量の火山ガラスを認める。出土遺物は、中世以前のものに限られるが、埋土の特徴等により当該期の遺構と考える。

#### SK2005（第46図）

Ⅲ区北東隅部で検出した土坑である。平面形は、長軸1.55m、短軸0.94m、主軸方向N 57.99°Wに配された、東西にやや長い整った隅丸長方形を呈する。残存深は約0.25mで、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は、後述するSK207と同様に、開削後一定期間オープンな状況で放置された後、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、須恵器と土師質土器杯等の小片が少量出土したのみである。本土坑も13世紀代を下限とする遺物しか出土していないが、埋土の特徴より当該期の遺構として報告する。

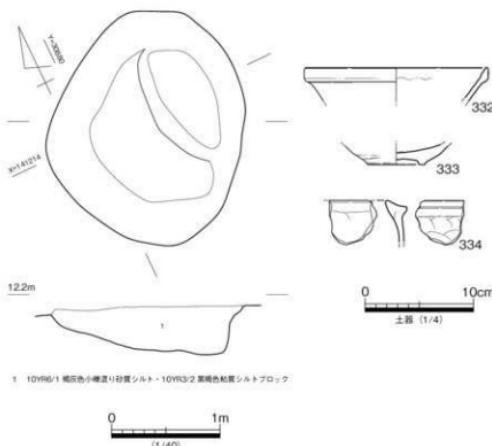
#### SK2006（第46図）

Ⅲ区北東隅部で検出した土坑である。切り合い関係よりSD2006より後出す。平面形は、長軸1.60m、短軸1.26m、主軸方向N 48.73°Eに配された、東西にやや長い整った隅丸長方形を呈する。残存深は0.25mを測り、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は褐色系粘質土等のブロック土で充填され、人為的に埋め戻されたと考えられる。

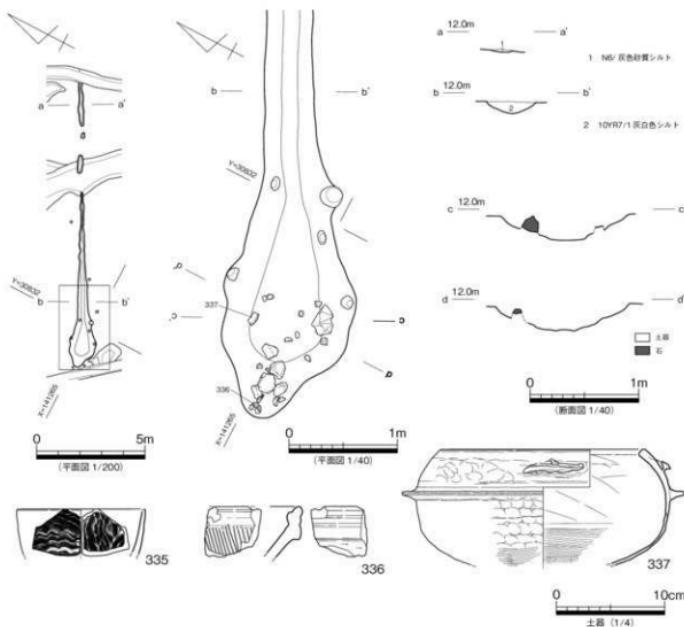
遺物は、少量の土師質土器平高台碗等の小片と、サヌカイト剥片1点が出土したのみである。本土坑も11世紀代を下限とする遺物しか出土していないが、埋土の特徴より当該期の遺構として報告する。

#### SK2007（第47図）

Ⅲ区北半部で検出した土坑である。平面形は、長軸2.17m、短軸0.94m、主軸方向N 55.37°Wに配された、南北に長い整った隅丸長方形を呈する。残存深は約0.55mで、横断面形は箱形を呈し、掘り方南端部に幅約0.25mのテラス面が付し、一部2段掘りとなる。埋土は3層に細分され、最下層には黄灰色粘土が堆積し、土坑開削後一定期間オープンな状況で放置された後、ブロック土を含む上位層により人為的に埋め戻された可能性が考えられる。



第48図 SK2012 平・断面・出土遺物実測図



第49図 SD2008平・断面・出土遺物実測図

遺物は、図示した以外には少量の土師質土器小片と、サスカイト剥片2点が出土したのみである。330は土師質土器皿。13世紀中葉を前後する時期と考えられる。331は、サスカイト製のスクレイバーで、背部に敲打による刃潰しを認める。出土遺物は、中世以前のものしか出土していないが、規模や形状、埋土の特徴等が後述するSK2009と近似し、近接した位置関係にあることから、当該期の遺構の可能性を考える。

## SK2009（第47図）

Ⅲ区中央東部で検出した土坑で、後述するSK2010と整った位置関係にあり、同時期に併存した可能性が考えられる。平面形は、長軸2.50m、短軸1.64mをそれぞれ測り、南北に長い整った隅丸長方形を呈する。主軸方向はN 27.92°Wに配され、周辺の条里型地割と概ね合致する。残存深は約0.5mを測り、断面形は碗底状を呈する。埋土は褐色系粘質土のブロック土で充填され、人為的に埋め戻されたと考えられる。

遺物は、混入と考えられる須恵器や土師質土器皿等の小片のほか、肥前系施釉陶器小片や口縁部内面に草花文を描く同染付磁器皿小片、サスカイト剥片各1点が出土した。出土遺物より、18世紀後半代

の埋没の可能性を考える。

#### SK2010（第47図）

III区中央東半部で検出した土坑である。平面形は、長軸2.28m、短軸0.98mをそれぞれ測り、南北に長い整った隅丸長方形を呈する。主軸方向はN 36.65° Wに配され、周辺の条里型地割と概ね合致する。残存深は0.38mで、断面形は逆台形状を呈する。埋土は2層に細分され、上位層はSK2007の上位層と酷似し、本土坑も人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、器種不詳の土器小片数点が出土したのみで、遺物から時期を特定することはできないが、本土坑も既述したSK2007同様、当該期の遺構として報告する。

#### SK2012（第48図）

IV区中央部SD2015南で検出した土坑である。長軸2.02m、短軸1.74mで、平面形は不整隅丸長方形を呈する。残存深約0.25mで、北東部が約7cm深く掘り込まれ2段掘りとなる。埋土は褐色系シルトのブロック土で充填されており、人為的な埋め戻しの可能性が考えられる。

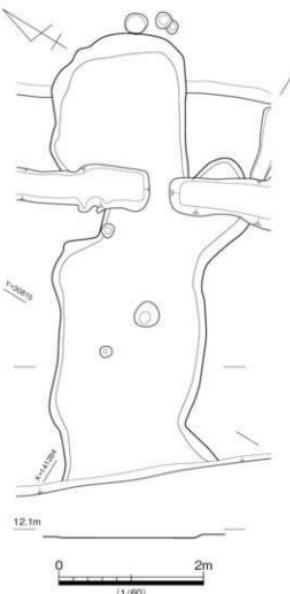
遺物は、図示した以外に、須恵器、土師質土器皿・杯・鍋、瓦器皿、備前焼、サヌカイト剥片等が少量出土したのみである。333は備前系施釉陶器砂目皿、334は土師質土器把手付鍋の口縁部小片である。いずれも17世紀前葉に位置付けられる。332は中世の白磁碗IV類で、混入資料の可能性がある。しかし、遺物の詳細な出土状況は不明で、中世に位置付けられる遺物も一定量出土していることや、本遺構のみIV区に位置すること等より、12～13世紀代の遺構の可能性も考えられる。

#### 溝

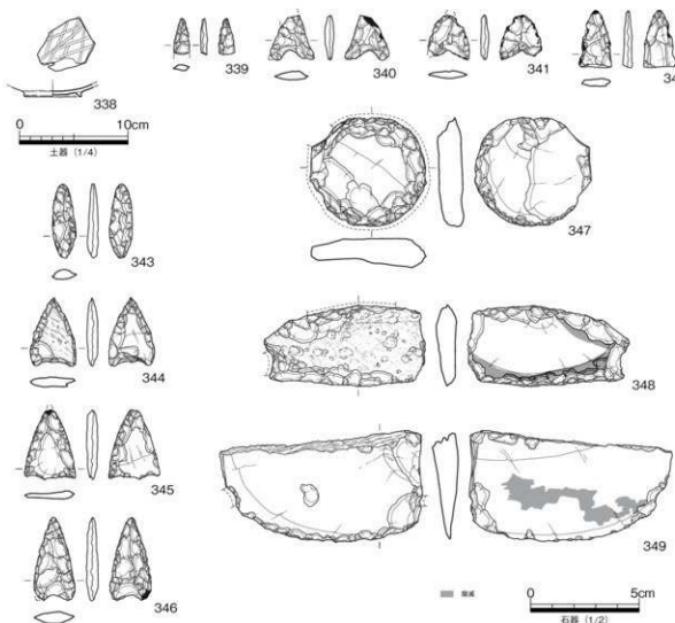
#### SD2008（第49図）

II区南端部で検出した東西直線溝で、數か所で途切れるが位置関係より一連の遺構と考える。東端は調査区外へ延長し、西端は調査区内で途切れ、1296mを検出した。流路方向N 62.07° Eに配され、概ね条里型地割に合致する。検出面幅0.17～1.20mと西端部で大きく溝幅を広げ、その部分で拳大から幼児頭大程度の礫がまとまって出土した。その要因については明らかではない。残存深0.03mと浅く、断面形は皿状を呈する。埋土は、灰色砂質シルトの単層であった。

遺物は、図示した以外に混入と考えられる須恵器や土師質土器杯・足釜、サヌカイト剥片等の中世以前の遺物のはか、土師質土器捕鉢、軒平瓦、平・丸瓦等の小片が少量出土した。また、微細な小片となつた銅製品が出土しているが、器種は不明である。



第50図 SX2001 平・断面図



第51図 包含層等出土遺物実測図

335は肥前系陶器刷毛目碗。336は備前系焼締陶器鉗鉢。乗岡編年近世4期とみられる。337は、瓦質土器羽釜である。口縁部に付された外耳の孔は貫通しておらず、痕跡的なものとなっており、18世紀後半以降に位置付けられよう。

#### 性格不明

##### SX2001 (第50図)

I区中央西端部で検出した浅い落ち込みで、西端部は調査区外へ延長し、全形は不明。平面形は、長軸6.0m以上、短軸1.9m前後をそれぞれ測り、東西に長い歪な隅丸長方形を呈する。主軸方向は、N 55.8°Eに配され、周辺の条里型地割の方向と概ね合致する。残存深0.15m前後、短軸の断面形は逆台形状を呈する。埋土は、調査区西壁の土層序（第6図13層）より、にぶい黄褐色砂質土の単層とみられる。

遺物は、少量の器種不詳の土師質土器や瓦器碗の小片のほか、サスカイト剥片1点が出土したのみである。出土遺物は中世を下限とするものしか出土していないが、埋土の特徴より当該期の遺構の可能性を考える。形状より、土取り遺構の可能性も考えられる。

### 遺構に伴わない遺物（第51図）

以下では、包含層等遺構に伴わない遺物について報告する。338はⅡ区遺構検出作業中に出土した、和泉型瓦器碗である。尾上編年Ⅱ-3～Ⅲ-1期に位置付けられる。

339～346は、サヌカイト製の打製石鏃である。339はⅡ区遺構検出中に出土したもので、下半部を欠く。340はⅢ区遺構検出時に出土した。凹基式の打製石鏃で、器表面は風化が顕著に認める。341と342は掘削土から採集した。343は、V区灰色粘土層上面精査時に出土した細身の凸基式打製石鏃である。器表面はやや風化が顕著に認められる。344は、V区黄色粘土層上面精査時に出土した凹基式の打製石鏃である。図左面には自然面を残す。345はⅢ区西側側溝掘削中に出土した。346はV区灰色粘土層上面精査時に出土した。347は、IV区2面上面精査時に出土した石器で、ほぼ周縁全面に敲打による刃潰しを加え、径約5cm、厚さ約1.4cmの薄い略円形の円板状を呈する。残核もしくは石製鍤車の未成品の可能性を考える。348は、I区遺構検出作業中に出土した、サヌカイト製打製石庵丁である。図左面に広く自然面を残し、右面の刃部付近に強い磨滅痕、背部に敲打による刃潰しをそれぞれ認める。ノッチは一方にしか施されず、未成品の可能性がある。349は、Ⅱ区黒色粘土層より出土した。両端に浅いノッチを刻み、背部は自然面を残すことから、打製石庵丁とした。図右面に弱い磨滅痕を認める。

### 引用文献

金田章裕 1988「讃岐の条里遺構」「香川県史」第一巻通史編、香川県

### 報告書

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公团 1996「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第20番 舞野・東二瓦礫道路」  
香川県教育委員会 2008「県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 尾崎西道路」  
香川県教育委員会・独立行政法人国立病院機構善通寺病院 2011「独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2番 旧練兵場道路II（第19次調査）」